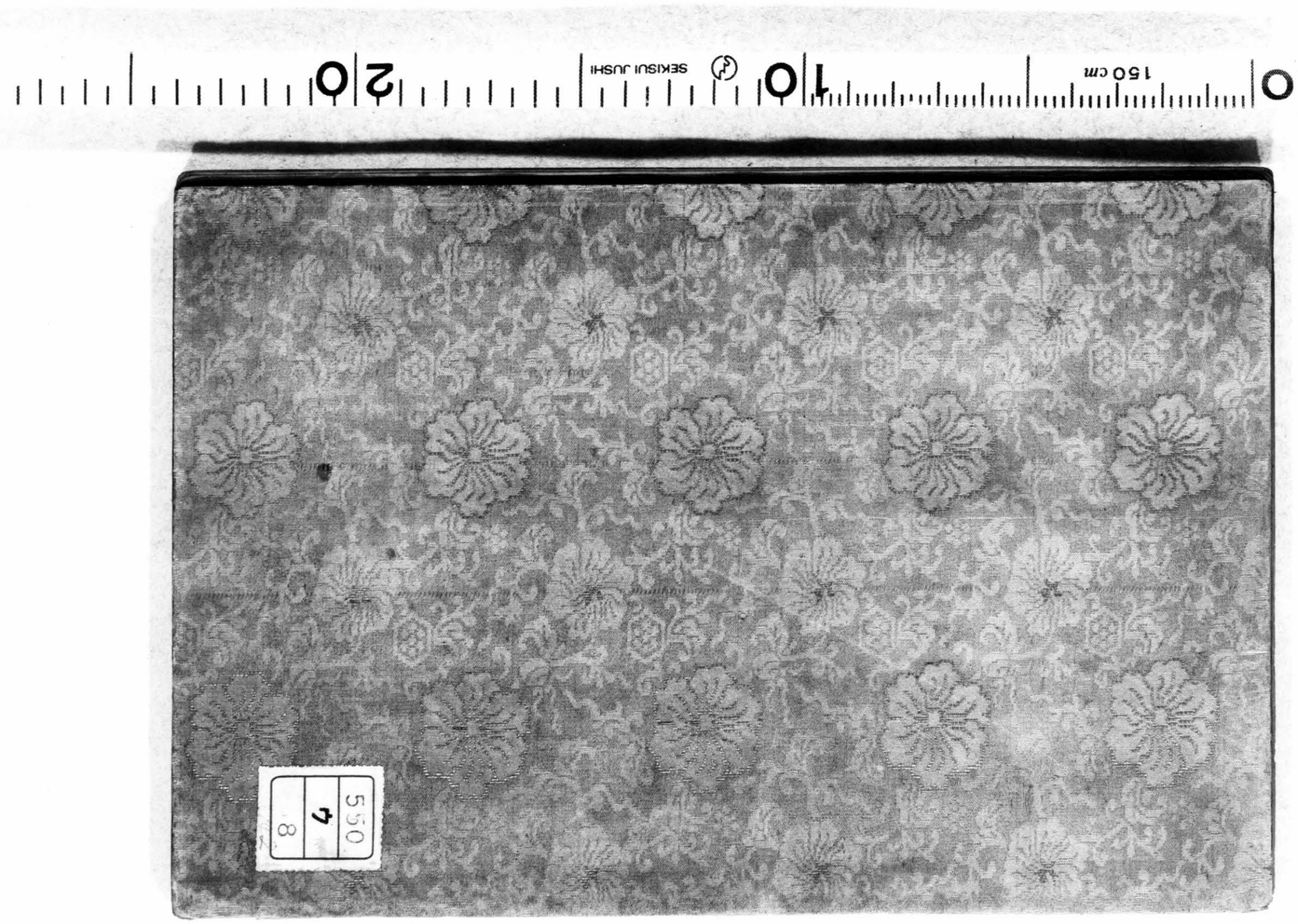

0
150 cm
10
SEKISUI JUSHI
20
550
4
8

550
ウ
8

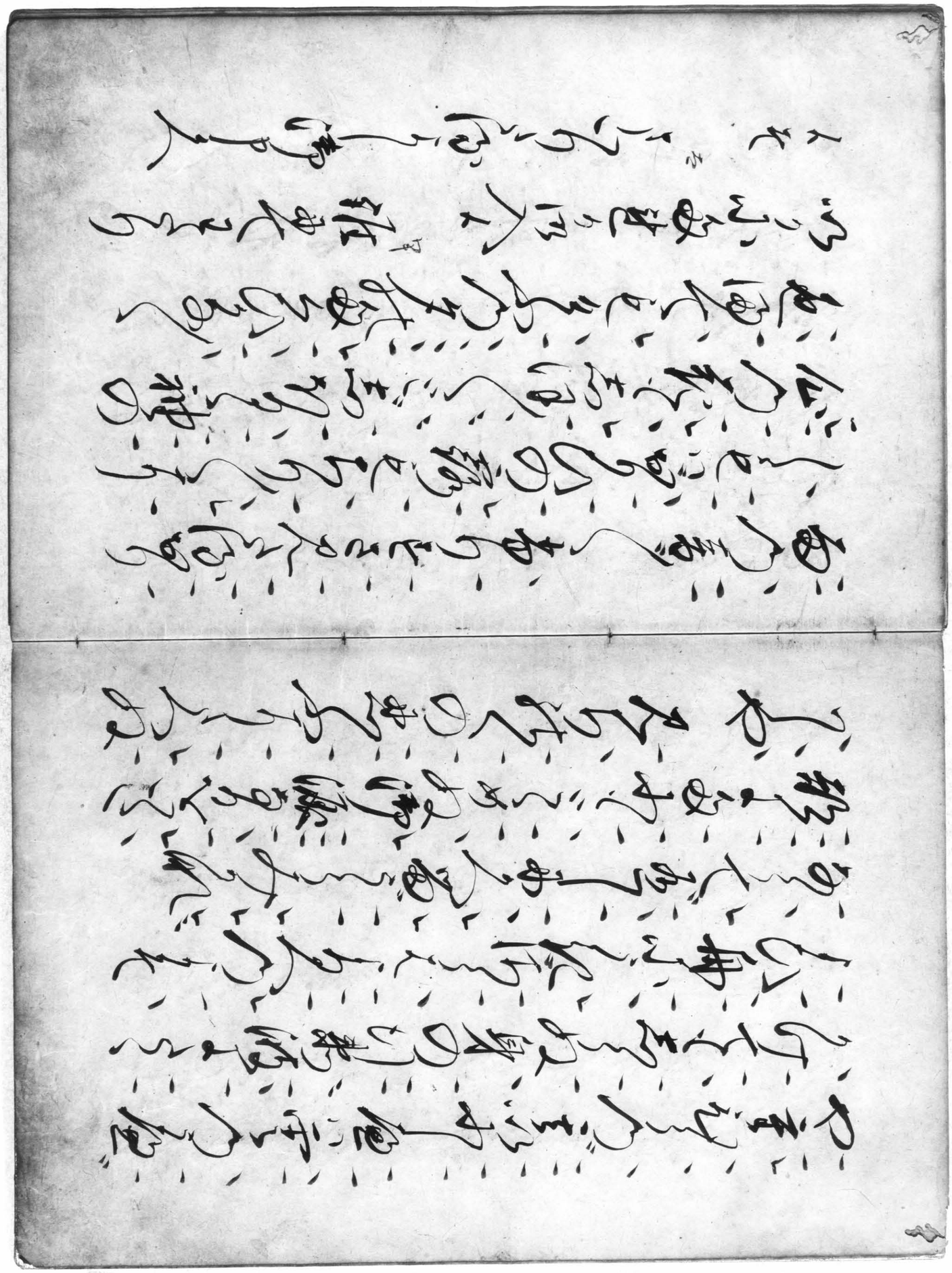
五寿
昭秀
養上
鄭玄
樓新等

五寿

是ハ鎌倉殿御代官人中狩野介入道
ともあてはさたを相國の御ゆるを衛
門尉殿うけたまり鎌倉へ四郎四
はとをれりあり中七人所りくる
ゆきたりをこれ四郎よりの所ゆい

御ゆいの在中はよろ寺の前とはう
えはきうゑたやくをさせはきた
山千寺の前ごとはてうはたらう
娘たちのゆふあはうこうこう
御方ちく地てはうれとはうえ
うれ幸をうきはしはうりてく

空ふく人面赤りく羽よりはゆとちく
めりを衛はとちくさめりきこを
琴の音をふくとはうはるしく芝や
あり、とはるるん　夫は北の樹
はよさく秋の月の水底よりはゆ
世のなれさのをはとがてあれ



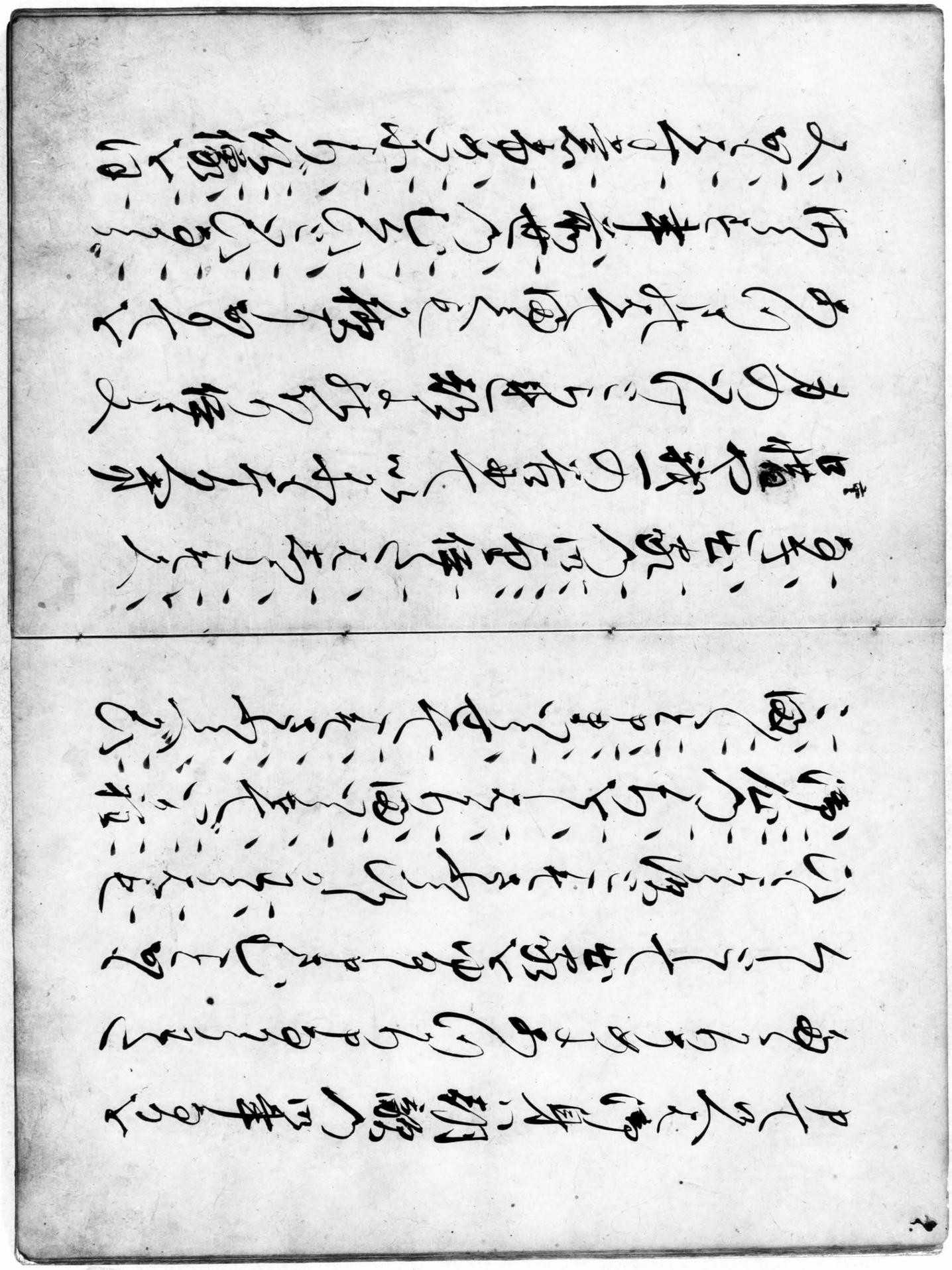
ゑきの四約り人沖きゝ人とゝりて
ゆゝ　身を是構死一日清
業命い市ゆゝの宣きおゝら
公い藩史の胡國ゝこゝれ人名
ゝ内よこめらきてゞじ屋人と寺
きゑ公ゝ所ゝゞれい所ゝ世ゝたゝり

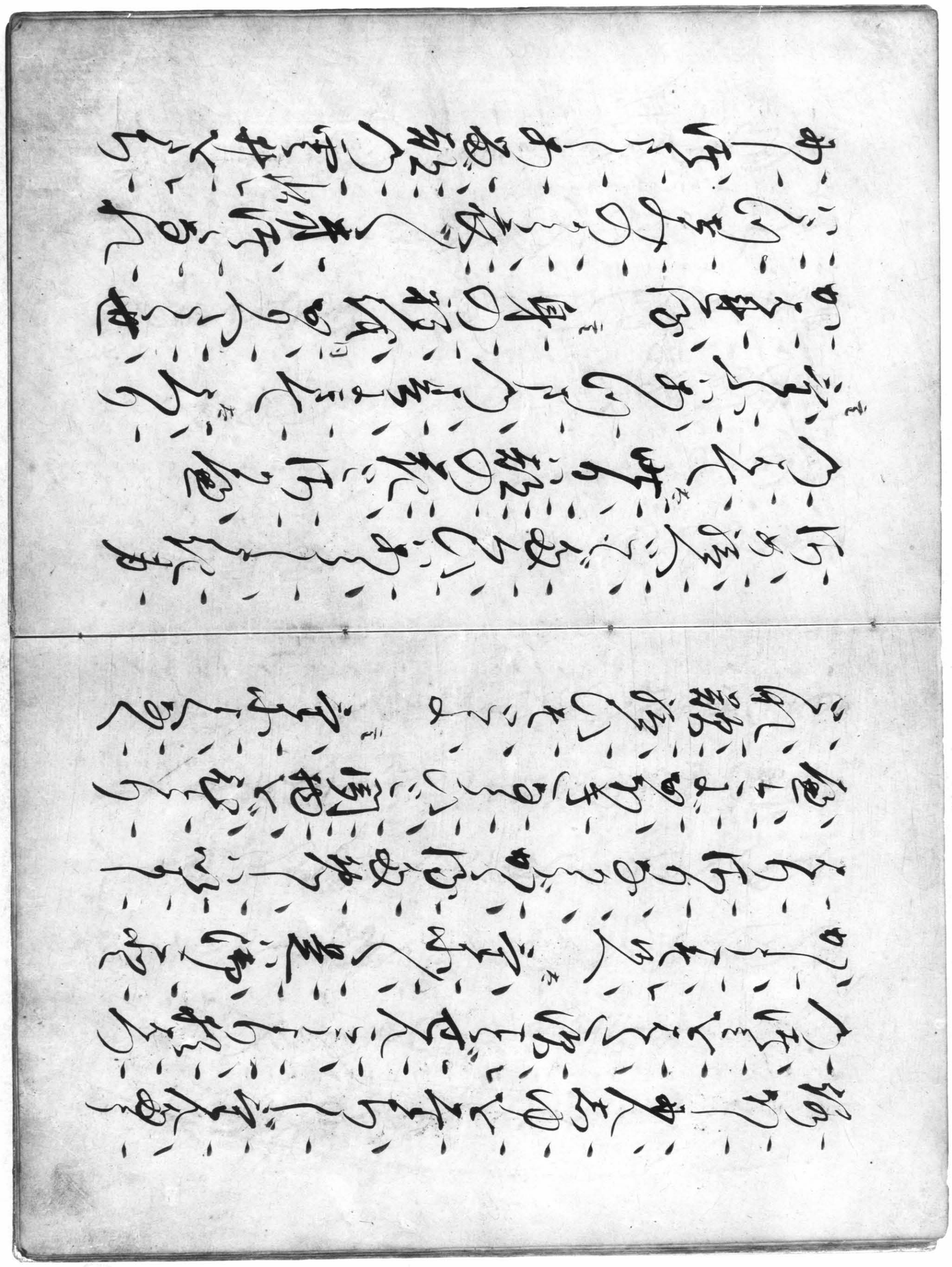
ゝゝ世て歌とはゝゝ内軍よゝゞ
我い所ゝこゝく歌陣よこめらゝく
ゝいきりのせめとゝ所ゝゝゝふ
ゝやゝゝりゝんゝ所ゝめゝ
伊ゝ小ゝゝ子寺ゝまのゝゝゝ
ゝ小ゝこゝ寺の前ゝゝゝ東小ゝゝ

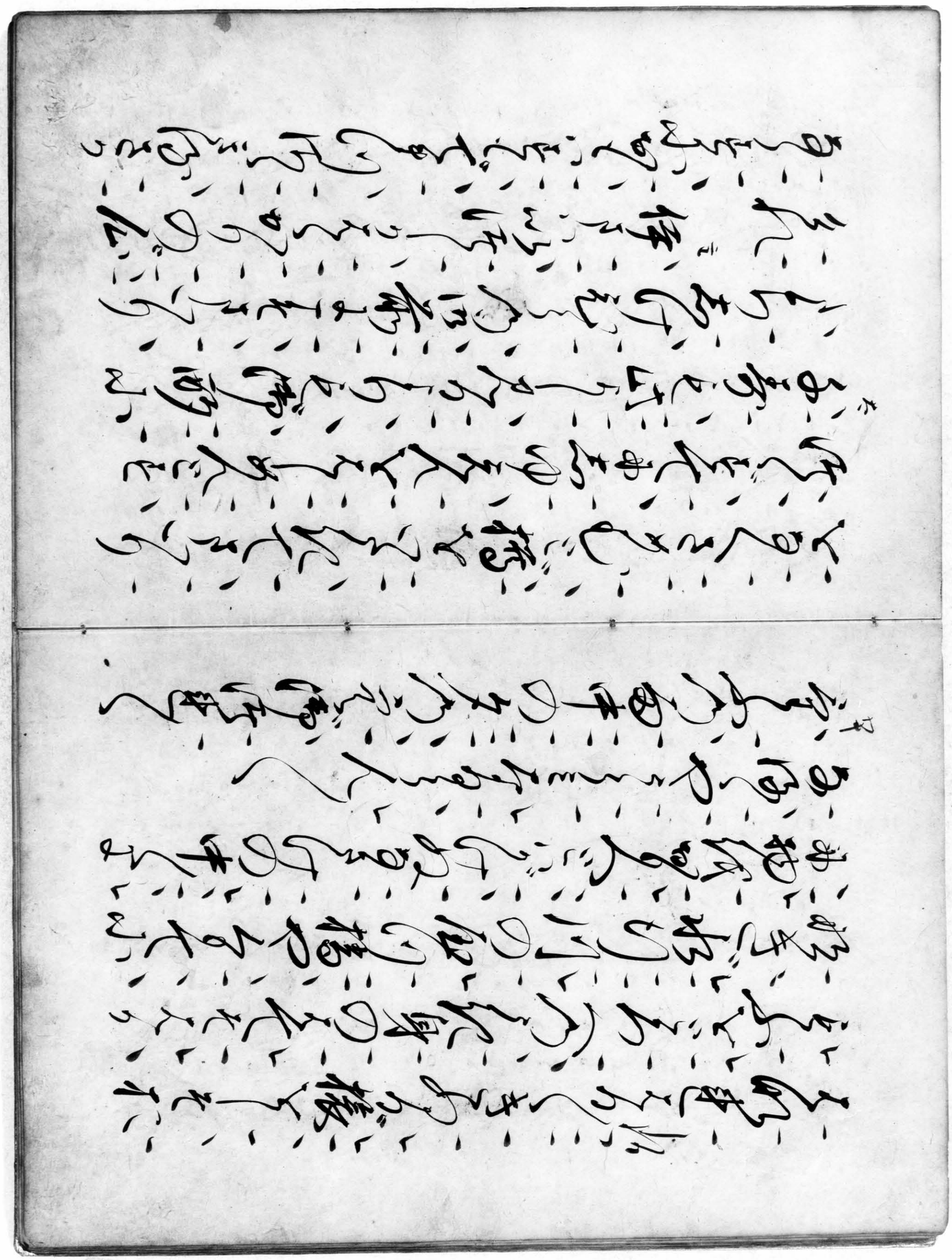
人をらしく行のためなりこそ
つゝぬいもしいかるべ御世にて
為人　御さうの世とて
行こゝろのうさしれ人なのたい
めしいかるべ御世仰られ
思ひつゝほうの仰なるこそ

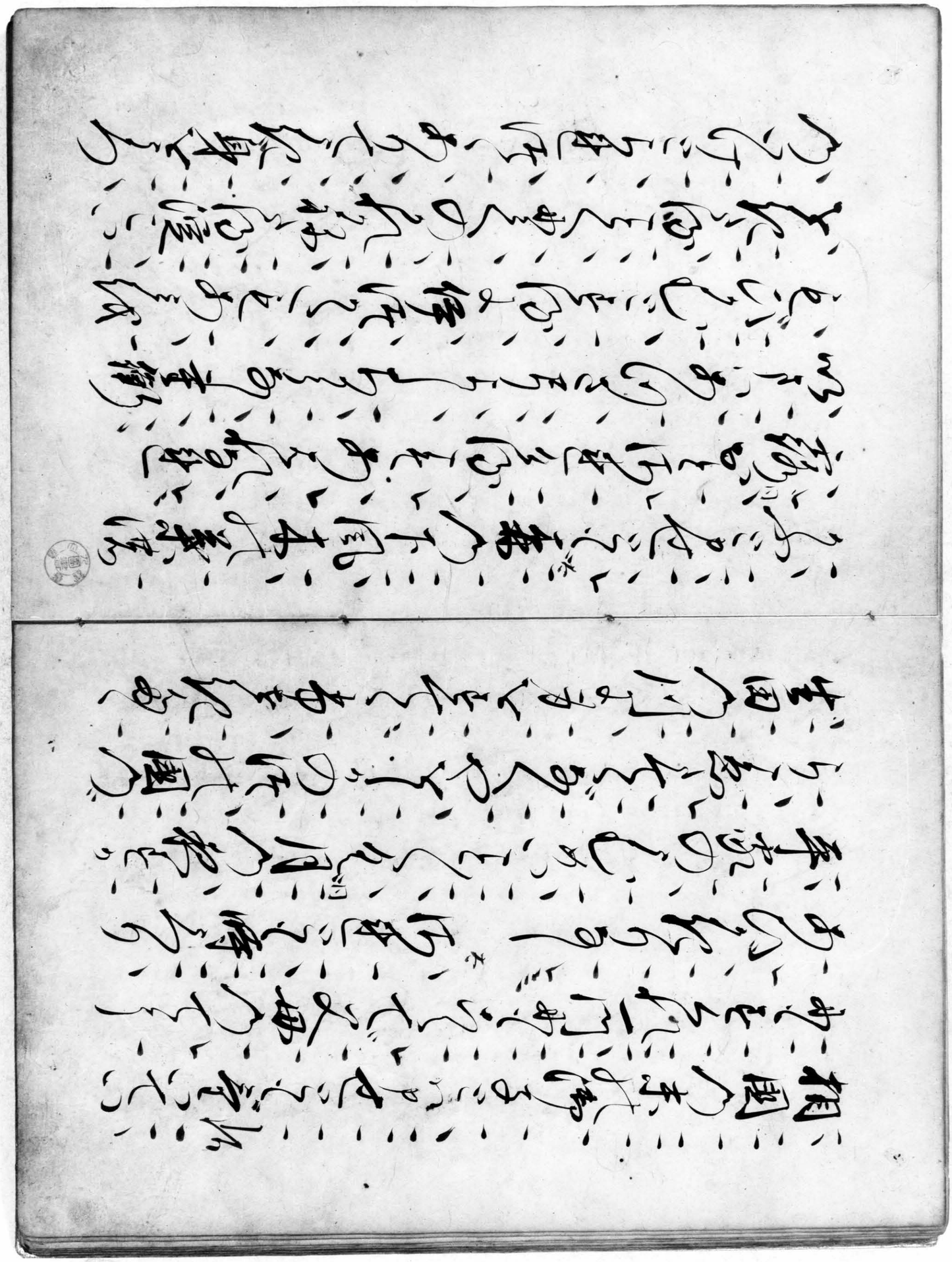
くゝあるゝとゝ為つゝちとくさめ
をとの形勢ら此仰世て記そをも
世さうりあり三為世公拾て四さふ
ら人　行ゝいその世とかさ祈く
中ゆ　御宮つ題の事のまし
あ戸て人い為つちとくさめ戸をこ

の形見とりの白酒をめくしてとりせ
さりかめりらしく吹くるゐは旅のと
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
きまとてたるかまんこむやうまれ
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃まこ紅粉寿ゐらて浜さ戸破
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
紅〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃思ひこそもりもがみとの退風めれ
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
いくは花の頭人めえりのおすくらく
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
天人金字やありさ紙そら中て人の
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
仏のむくゐのききと情そ頭ち紅花の
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
生紅葉の秋たの思わ出とてらぬ見
帆の小千寿の花さそく咲わあるる汤
さしよ中らりし出家のつと風れ奉きの
風俗して見ゆ人 御のとく言らし





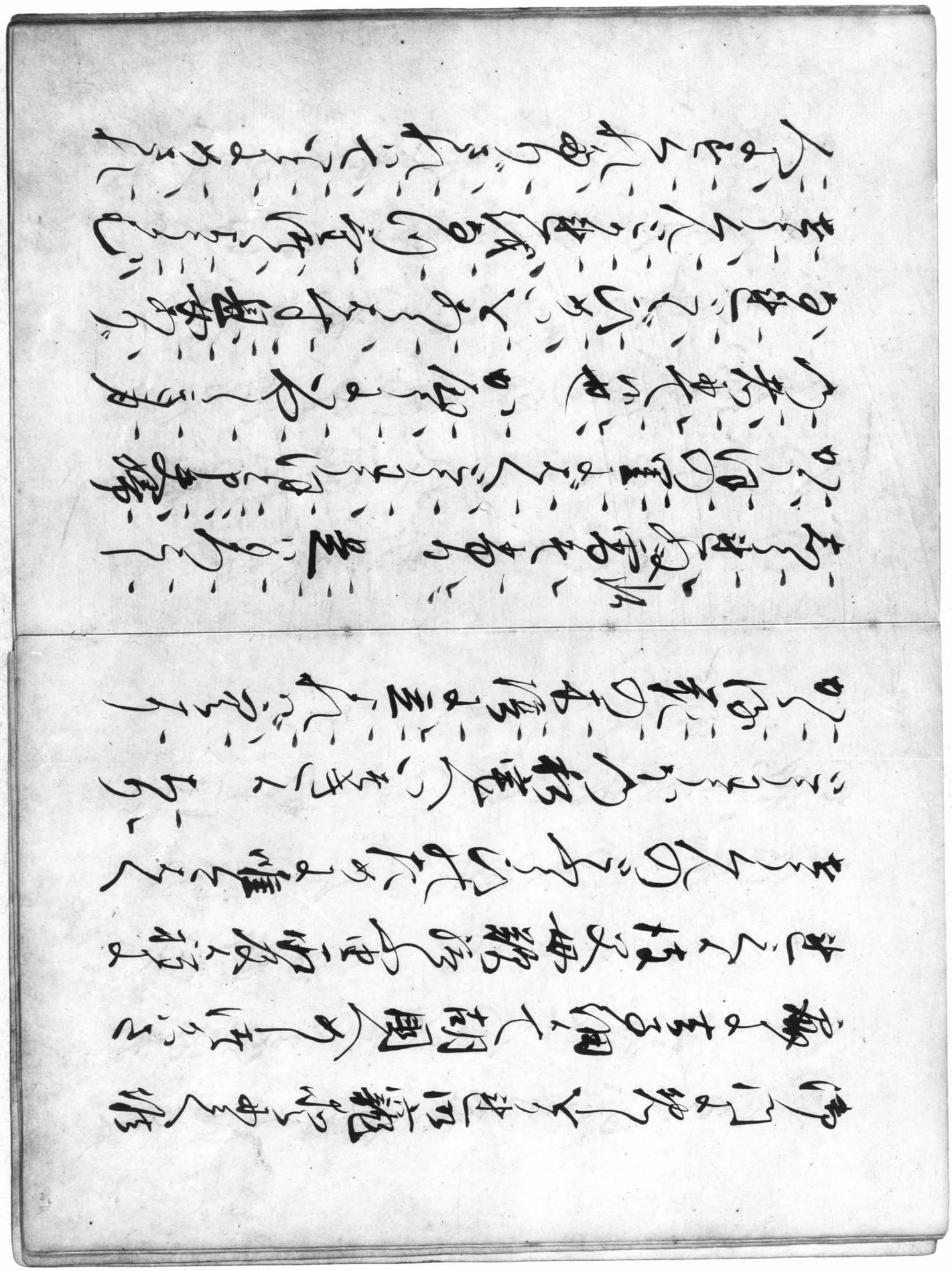


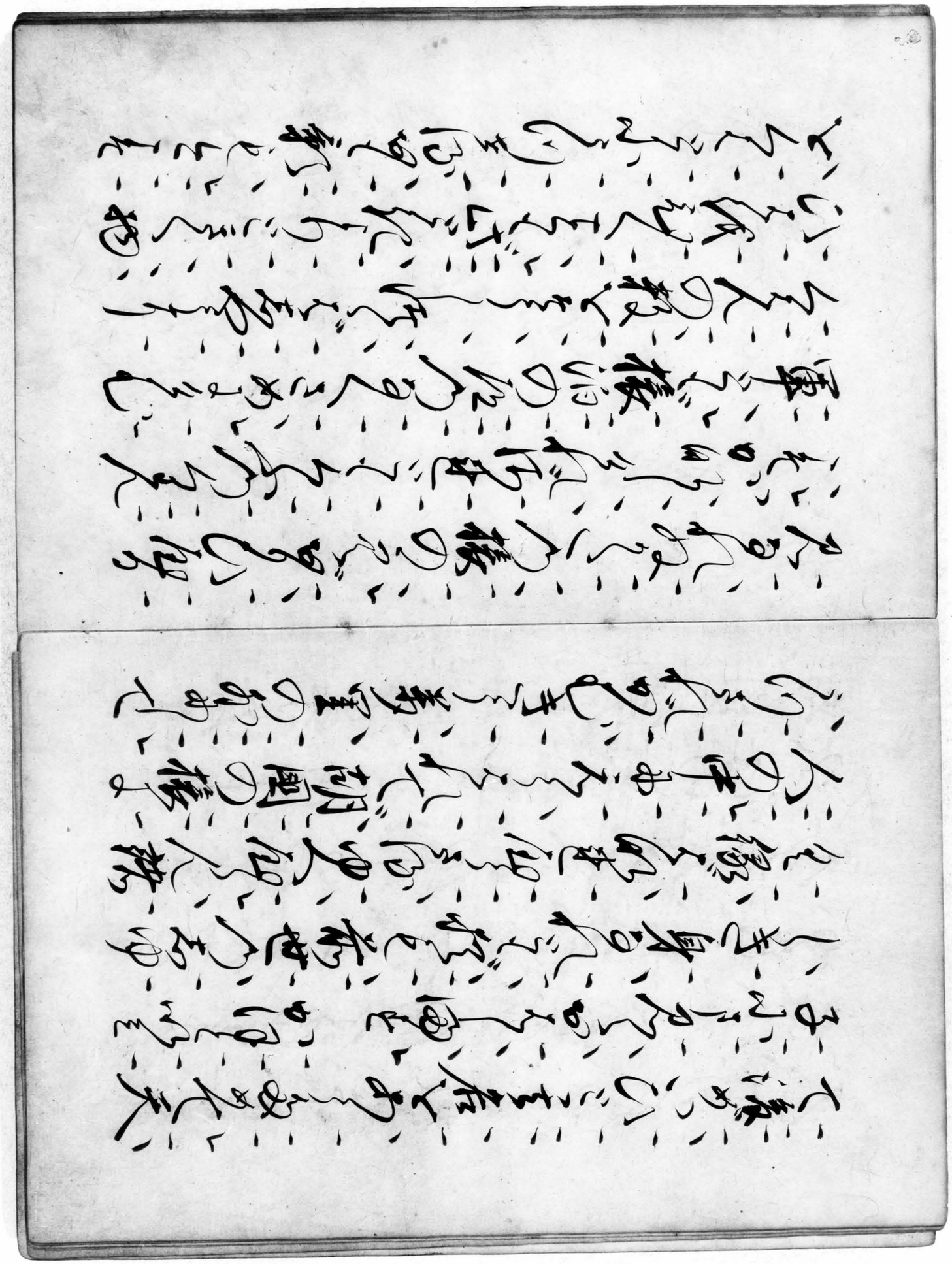


あてらきぬ言こきかれく

昭君

かぶりは若いを婦ってのりほ屋
ゐ住居を所若ゐ人さんてえ山ゐく
ほふくこうまうほとゆま婦の人
ひんりの息女と一人ゆりてゐ君と昭君
こゆれるうしなきを夢人ゆてほとよ





思ひしらされ　故昭君が申

もとにくく見えけりの色よき白う成

さやうに人々し柳のかけにみえて

ほゝ思ひこゝろ風に縁ごころに命ちよ

里そ末濃のちりとさとりしく

住くも庭もとえぬ人ぞかはらぬなり

三ッ返りとらぬ間に日も暮れ沈む

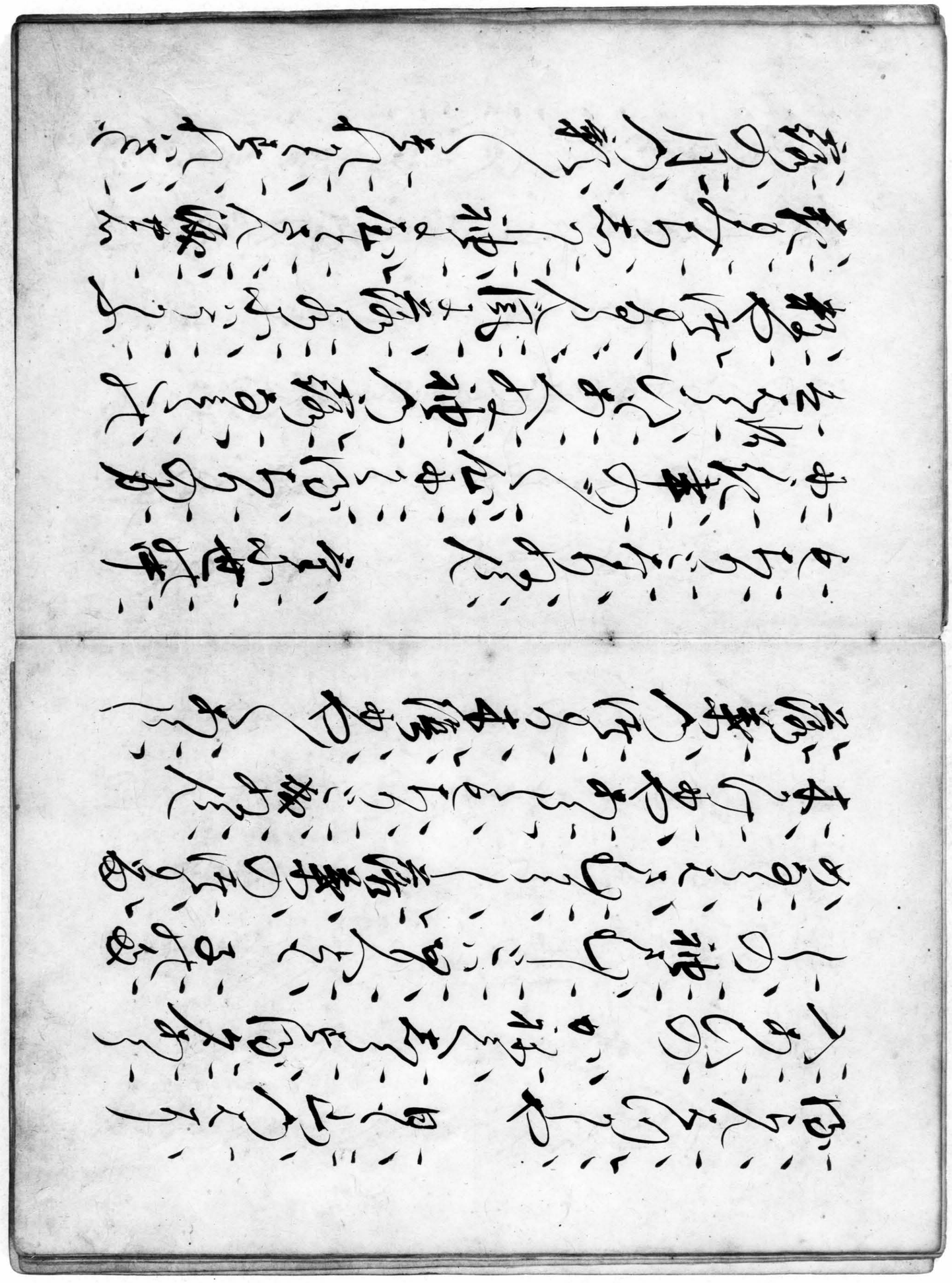
ともむきぬ　雲ふや似て山のたぐひ

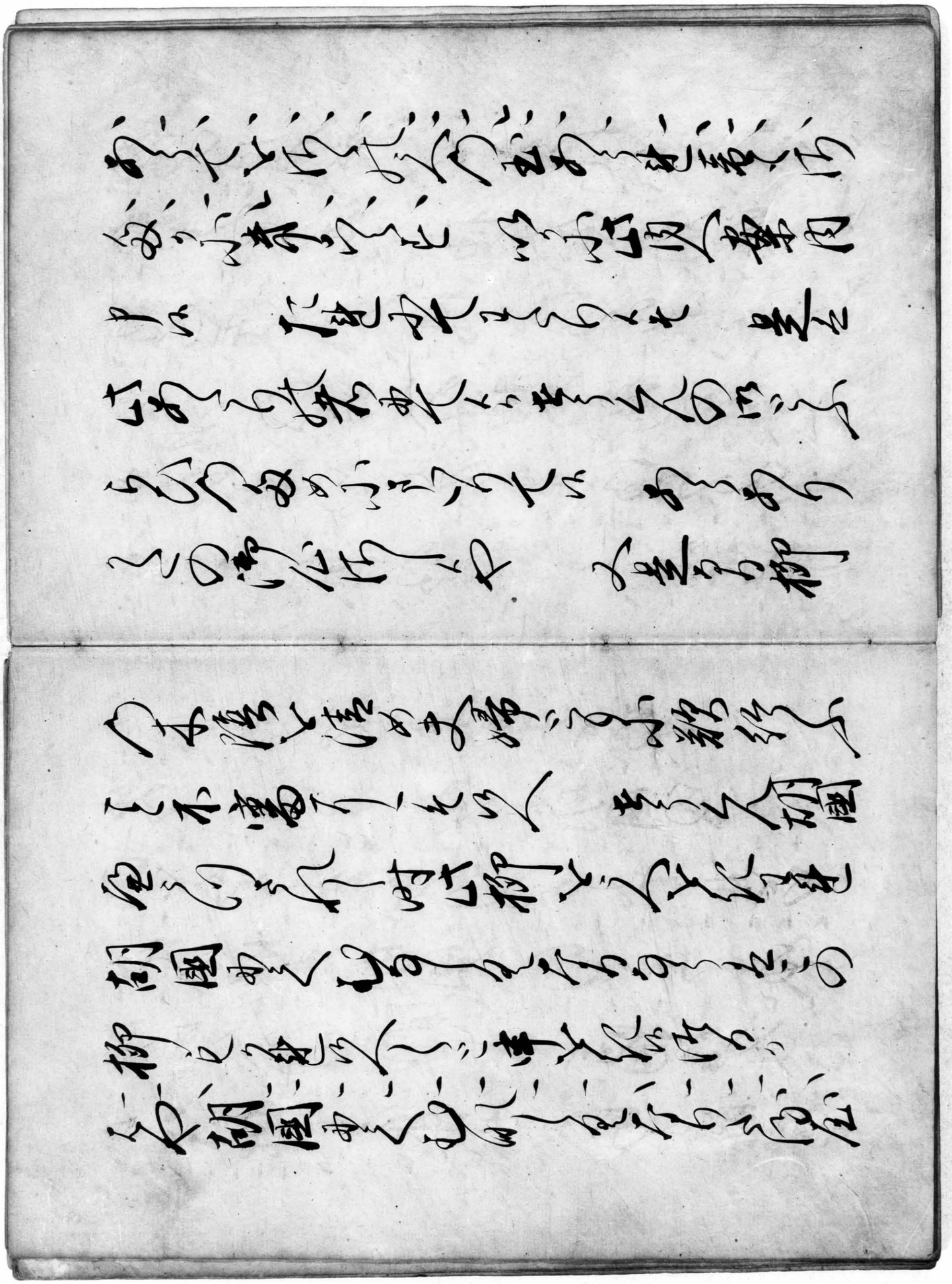
秋のもとして行く水の音にながし

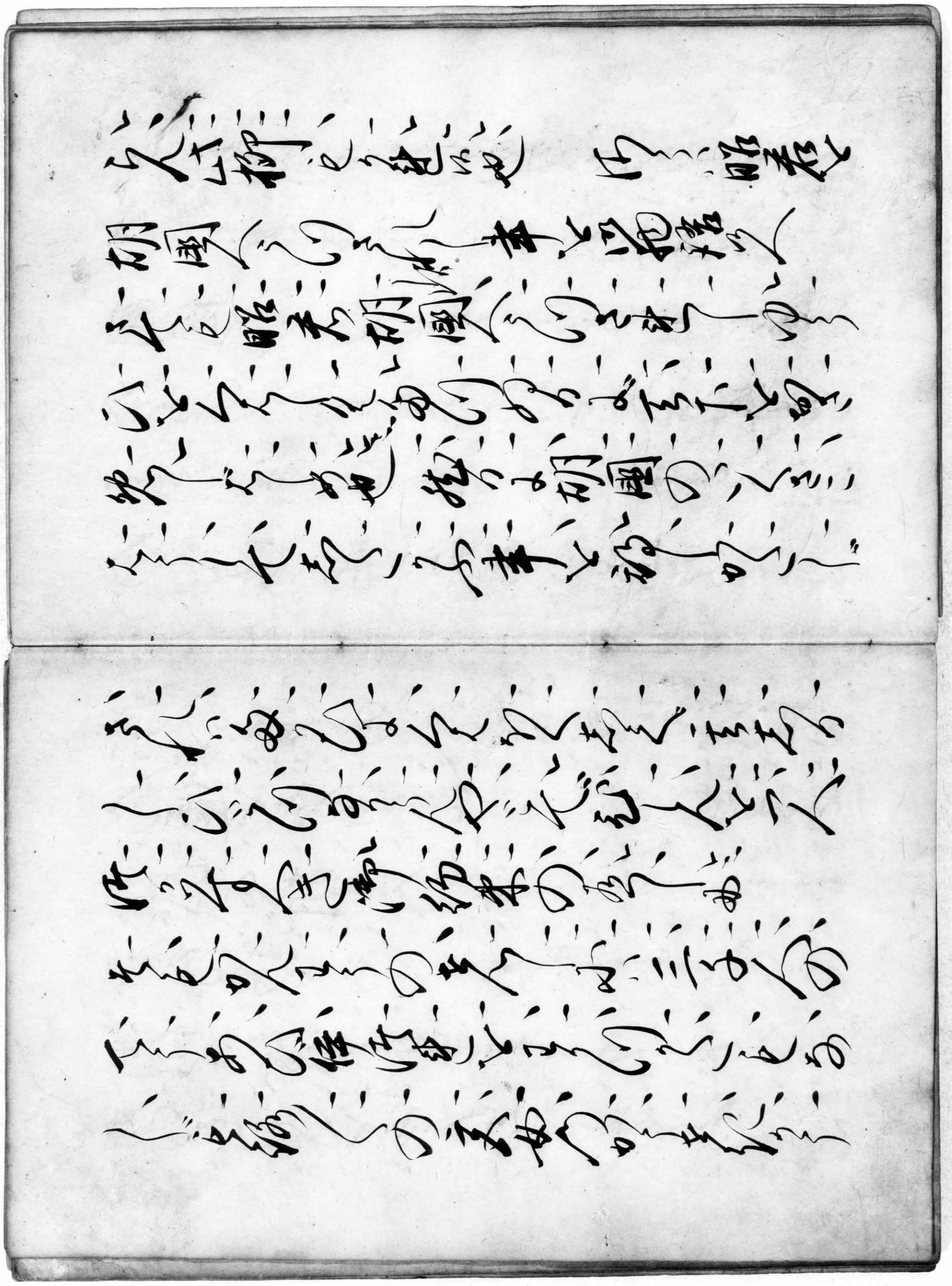
こゝに思ひ入りて風もさそふ涙の袖濡らし

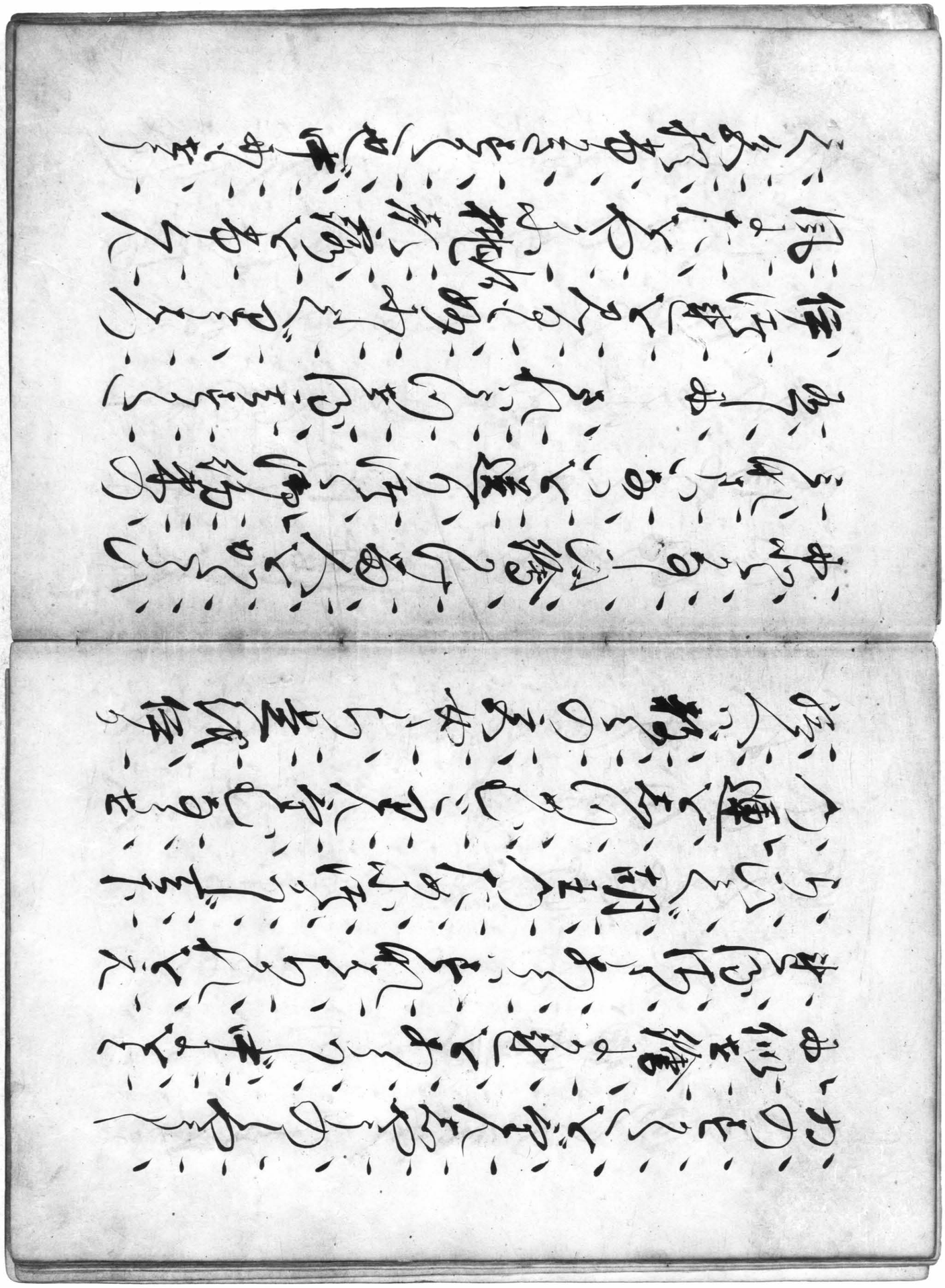
思ひもえぬ事をは思ひきる子の中への

たゞよの流れの庭にもえこゝろやさ



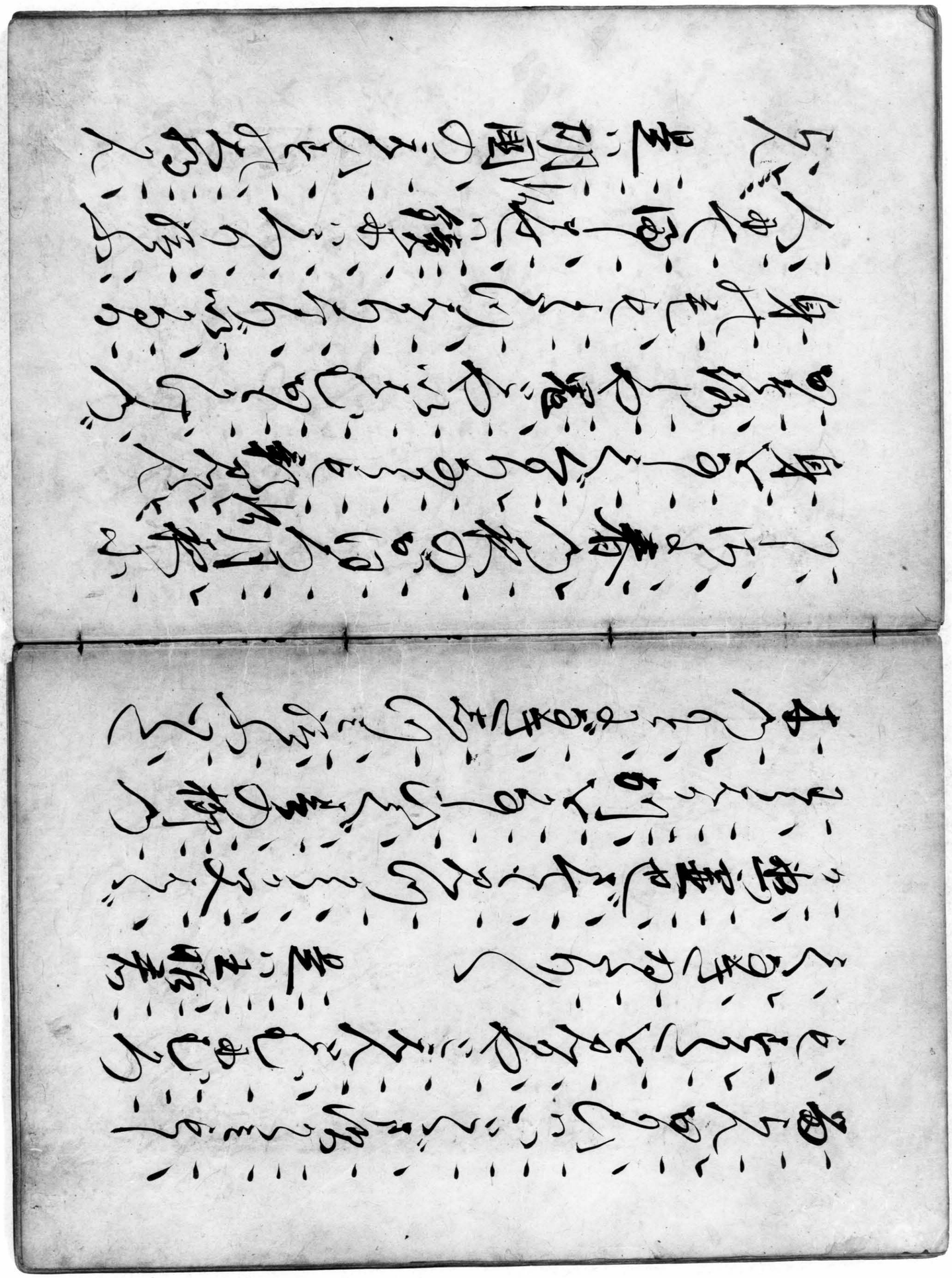


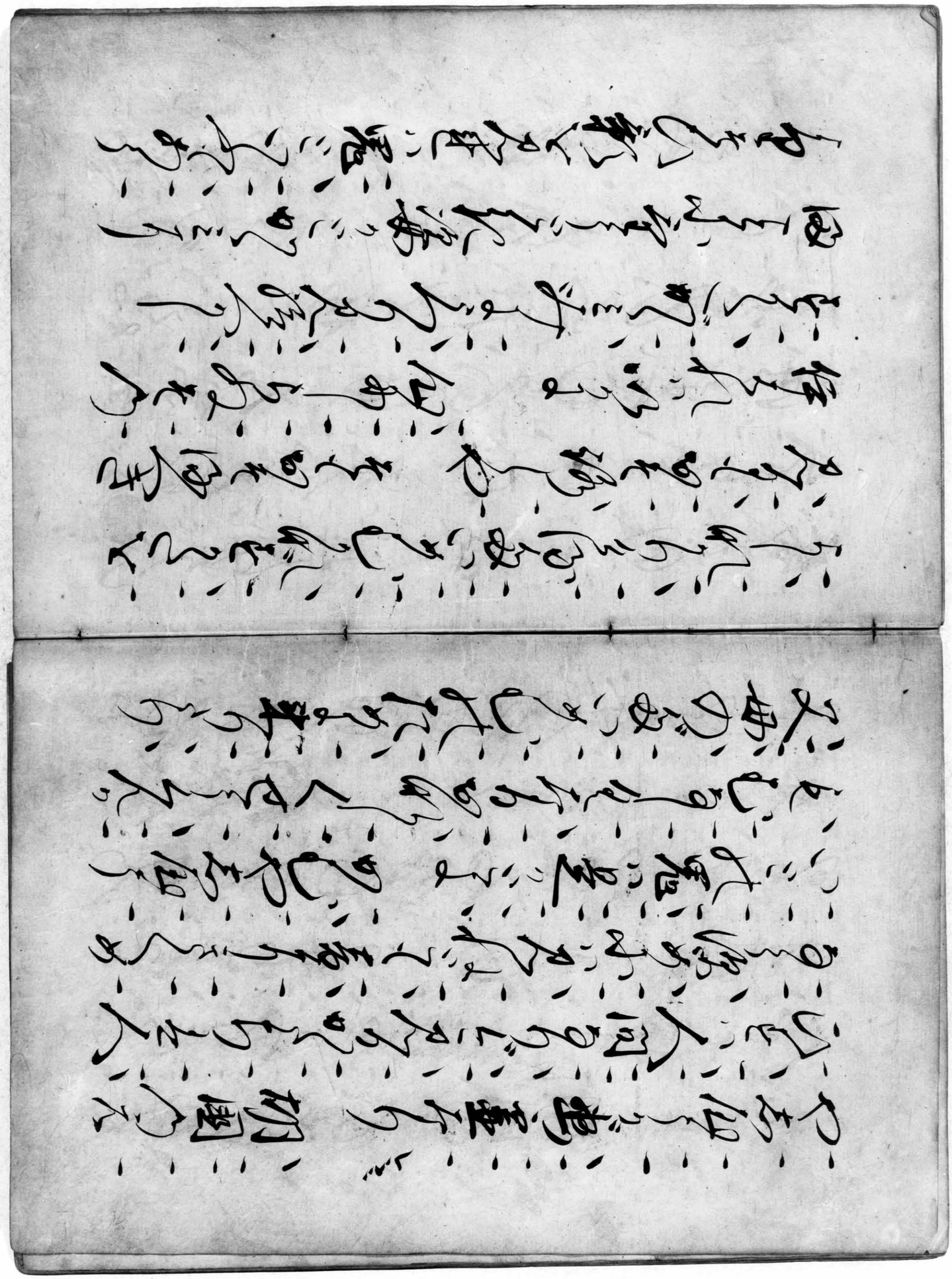


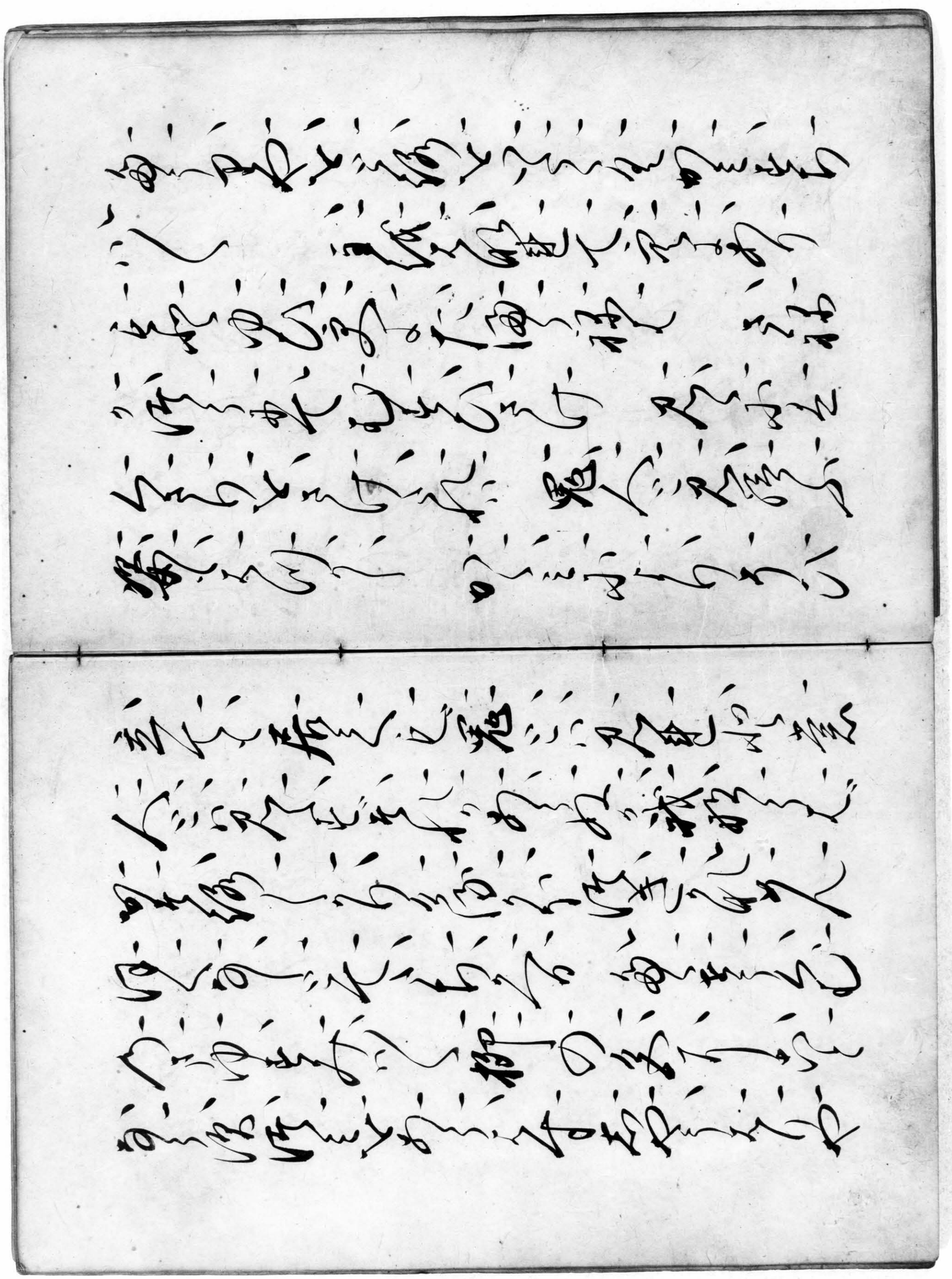


先仙女こ実とむとしりよ仙女むる
しる柳ゝうゝ花と咲ゝ尺
うりをい別仙女の海たり仔こせ
法人山柳と鏡よりそけと云
こゝゝ仙女のをゝゝたり咲そ是ゝ
女ゝ人ゝき　それのをゝ源鏡ゝ

高き人のうりゝ面たり　美ゝ
女とうゝゝゝゝ　ゝ人間ゝのをゝ
しゝ面をゝ尺　ゝ尺ゝゝみゝり
うゝゝゝこゝ宮ゝりをゝ接人せ
をゝゝむゝ年ゝ尺ゝ　花ゝ
ゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ







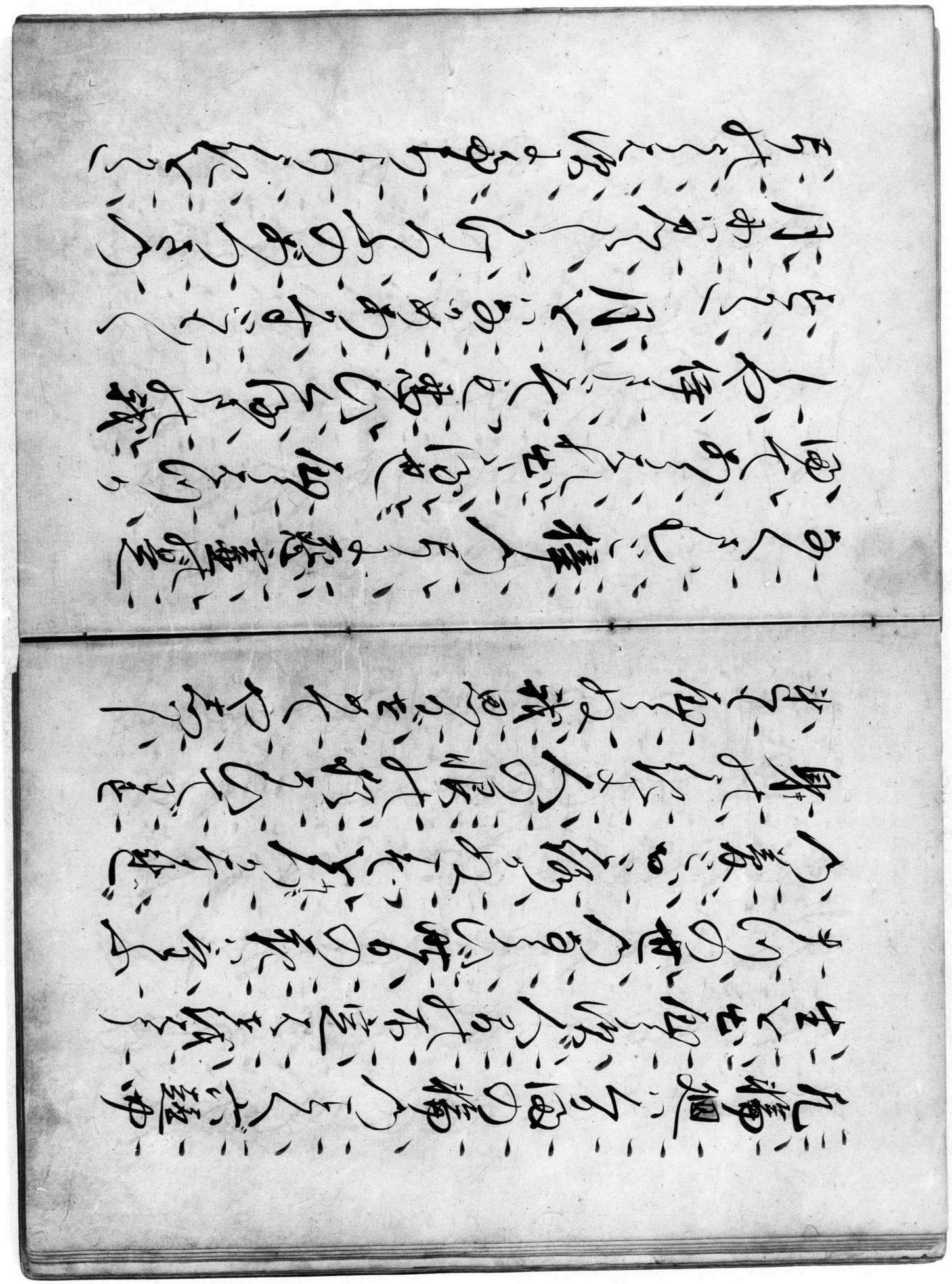
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

參上

抑是は先達院より法[illegible]
[illegible]御長女參の上へ
四拍氣はの御座[illegible]
と結し大法秘法護摩料[illegible]
御幸也四座の[illegible]

義よ照日の方ここにて
ありさの上の氏源りん程あ技みて
と清し生霊死霊の方さりひと様よ
りけさせ中ごこの御幸あそやそて
中付ちやこ春　中ノ二　天清浄地清浄
内外清浄六根清浄　地人魚

どそそちりこ所なりこ濱のあ毛ま
こ四てりありおゆりけ三乃車
あ清乃原ぶ宅の日ぶそあ人
地ちけ宿乃原ぶ原りこ
ちれそ明りこれ世うし清
とこ方ぶしくめこ所やしこひる人

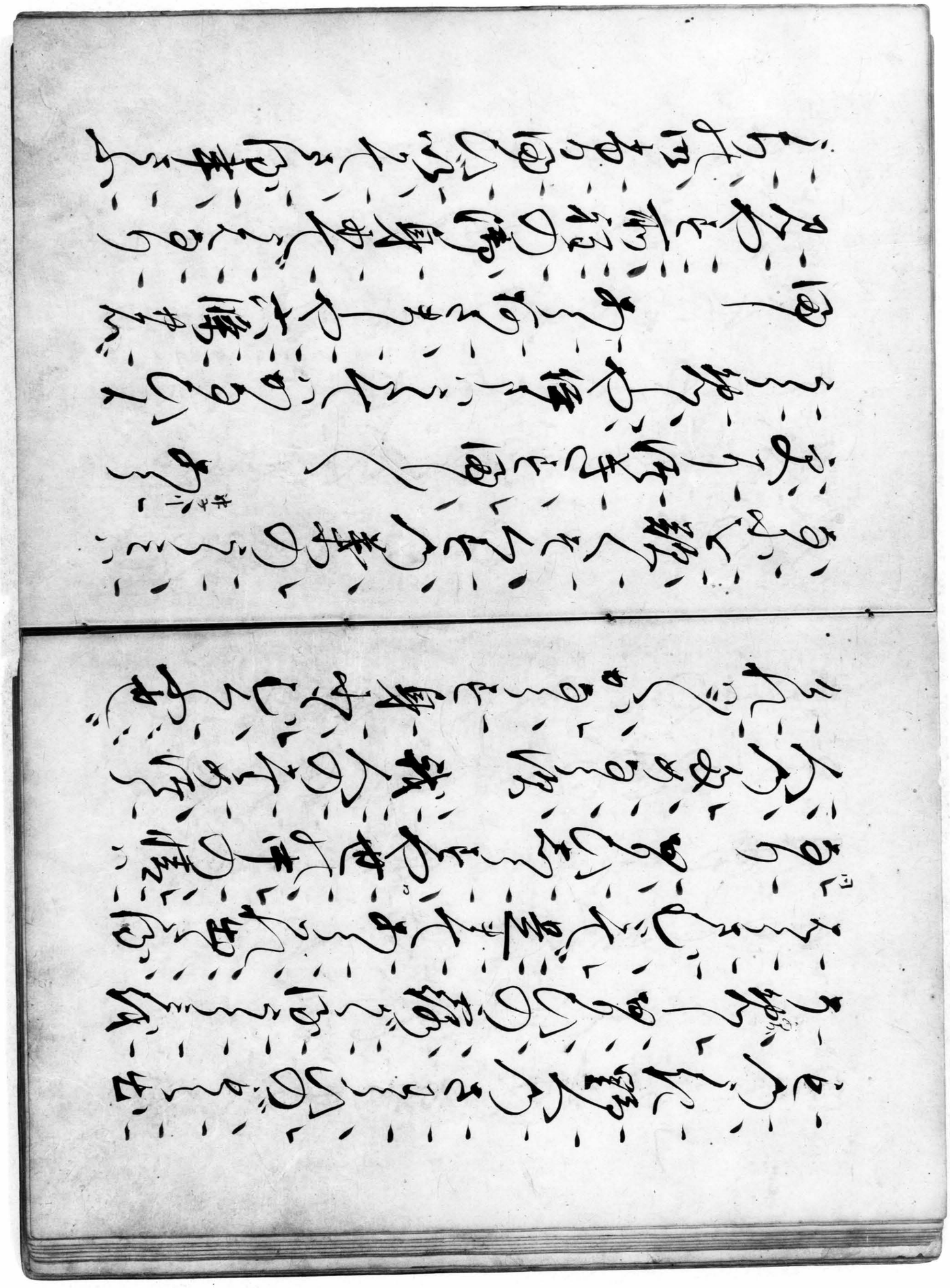


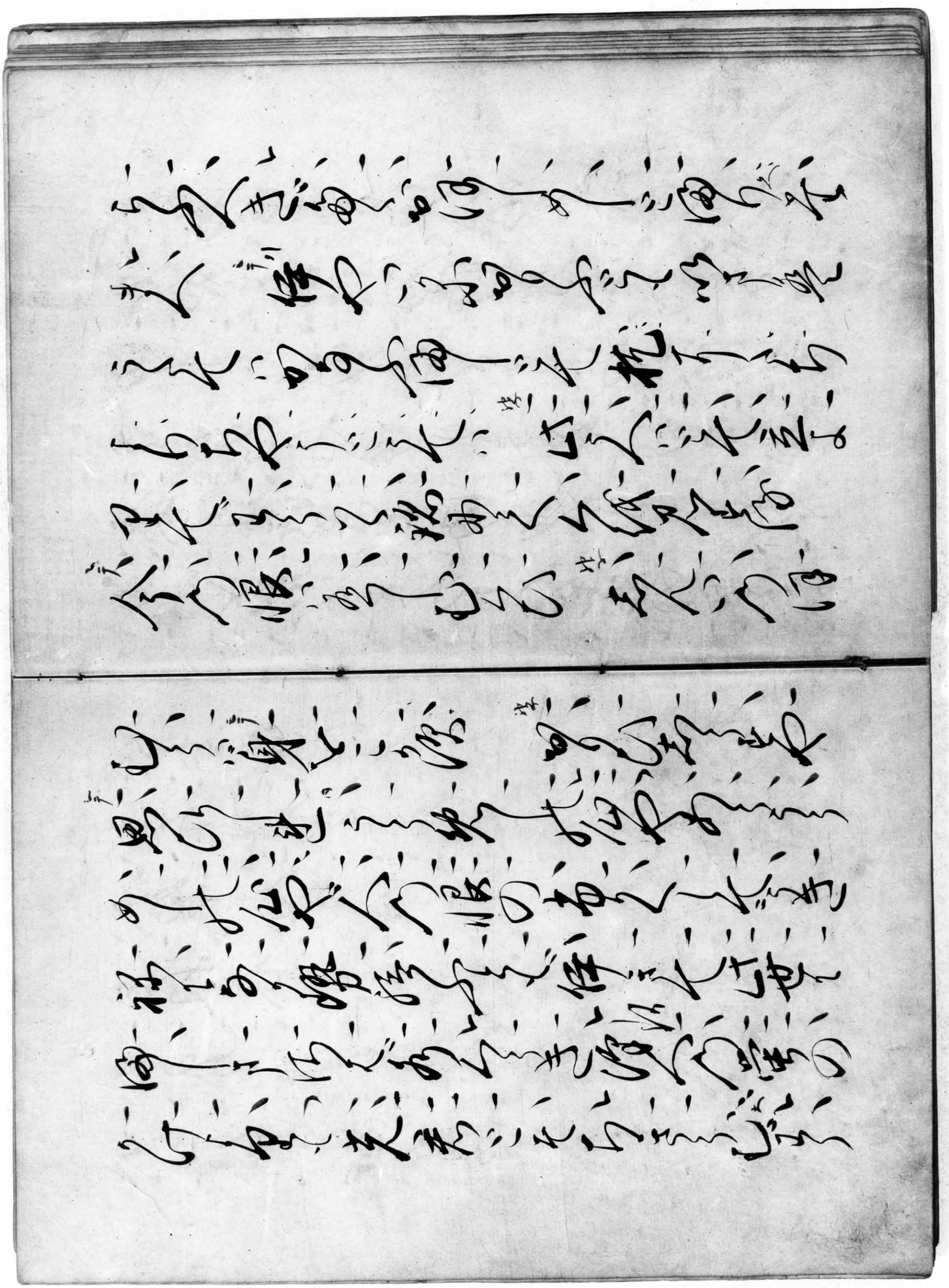
ら人く　あ所さの与へ者を
伊りをやく　あ所ら屋湯
ゆ此所ふかゆれて　ゆ人
れをふ人ゆ　ま者われ
あ也ってしらぬ上ふ屋
分屋ゆれ所ぶりあと也房ど

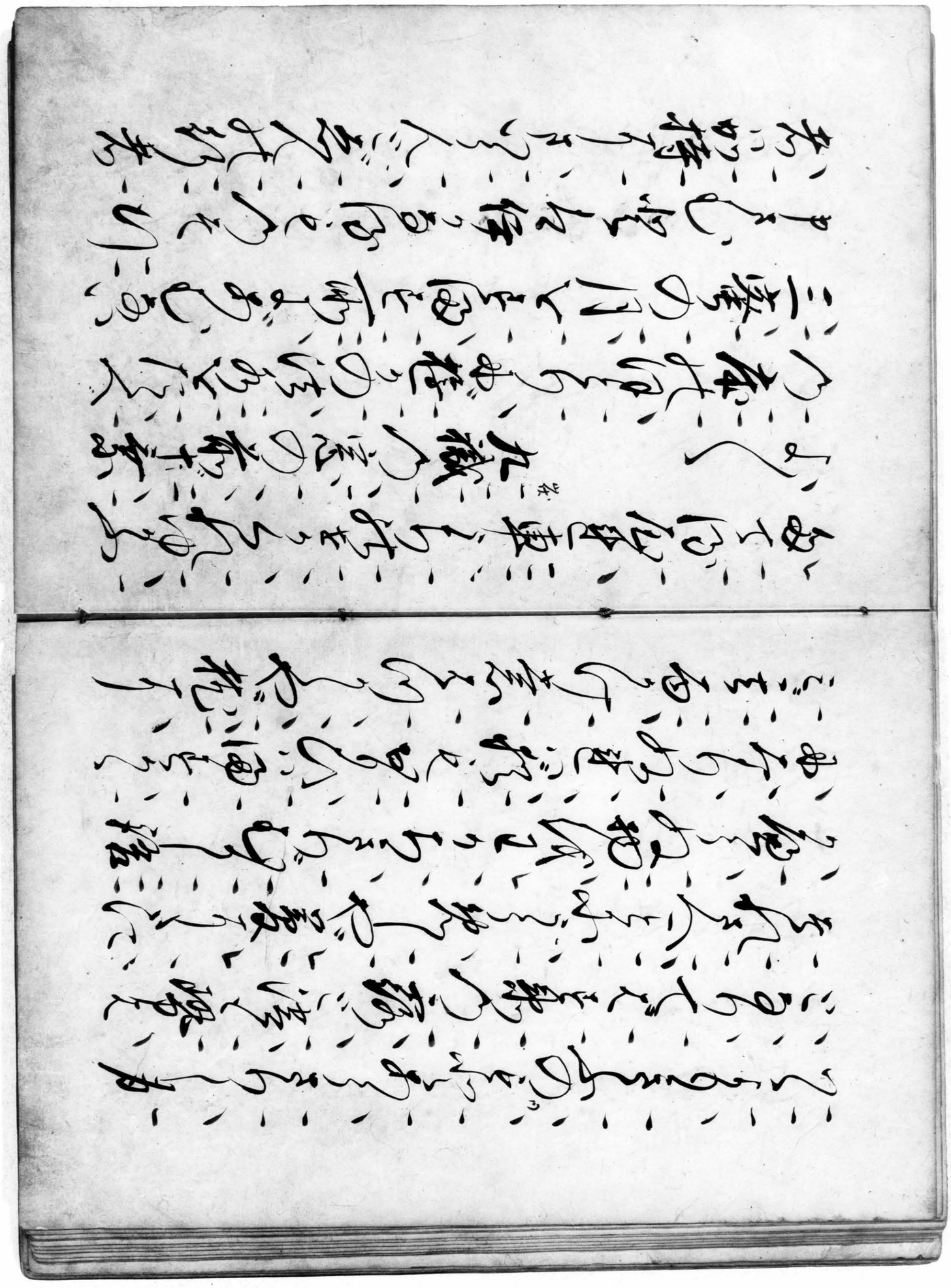
ゆき人ゆ半ゆき車ゆ
ゆよりゆき所めくゆき所ふ
伊ってゆよゆ様の人ゆや
はら人　おくい相音ってゆ
所ゆ所者と湯ゆ　ま者
ってゆ人ゆれひぐゆき人

もなくぐがりむきぎ身もあるる所よ
仏りさてうれそめぬらん　雀今
ありさのうれ若ぶしのきくあるる
世世ほどに仏りるほどもよごりの白
しめを是い六條のみやと有の恋
蓋たりゞ我せてりあるる〜仏あ色ハ

雲上の花の春の初ハ梅よ
ゆ世仙洞のうみ花ハ秋ハ秋ゞ
月あたるあ世ふそそるやう
たりる身るれうてどうる色あ世
いあさるハ日新ましの海のあり
ゆたりゞるりこのきもりて海







ハ、ゆとはき　ぬいこん女新ハ顔
どとなげだ川ほ　の家とこ
ちこ、ゆ　ぶ不浄と　ちこ
の空さ　ハ　ゆを　ぬう
ほうと　くこと　こん
以ほれ　東方　ほう　こん

お海く　ほ　む女　ほ　以ふ
以者　ほ　ほ　者人　者て者
ち　ほ　ぶ　よ　女ら仔　方
あく　ら　ら　ら者　ら者
ほく　ち　ち　ち　ち
こん　東方　ほう　こん

南方人あり釈迦　西方大ごく
明王　北方金剛　釈迦如来
中ゝう　大聖不動明王　白毫さ
まんくとはらくぬきたまうぼちや
おそそそやしゆたのうまんだや
うう　統若得大智恵ぢの方しゆ

身、次仏　仏ゝくはらくぼそ縁ゝ然人
ぬやゝもやゝ　是面ぞそ悪魔この
ぢちみて来る面ゝうくちゆれ法
と堂ゝゝ　悪鬼仏縁ゝ
ぬんかくちひ　ゝとくぬくゝ
ゝ家よ来那ゝ　仏得脱の方ゝ

たりけりそなたへこそ

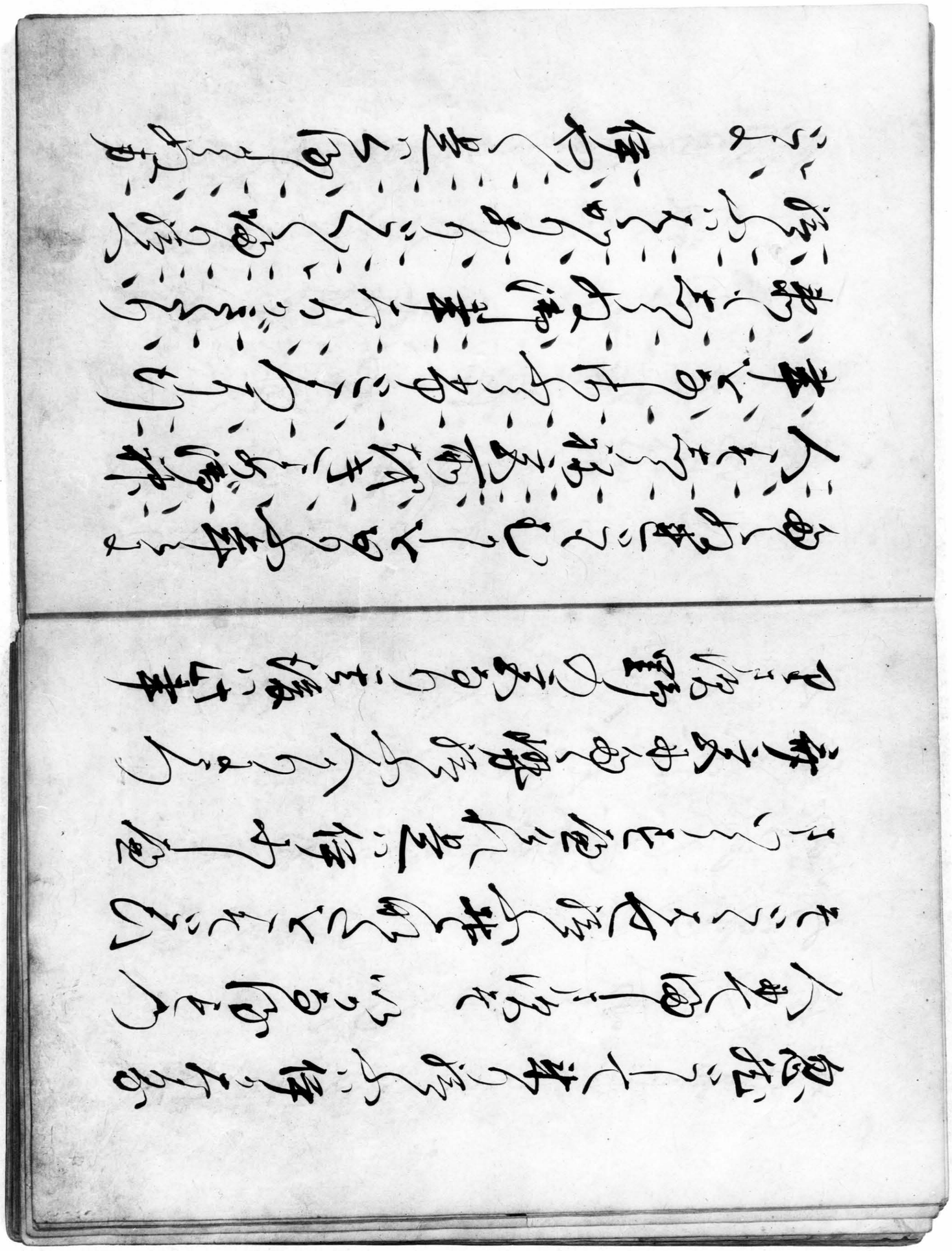
野辺

是は一所不住の僧也我山林を
形よりて洛陽の寺社ゆかりなくお
ゝ廻りて作り松を東西にうゑ
たりし人はいかの野辺のゝ草ゆゑ志く人程
あはれとも山風ゝ伊そきは是ゆゑ毒

と入りて入の野の末に田鶴ゐて
あめちらちらめてやこ日りしの
我山田鶴あそび遊ぶ馬未だ多居
小雪きぎしりあかつぬ振りり
こいそ行こうひ幸屋人らく
吹ぶ時雨あさりあひぐひ
そ立てき伊を人神に祈て
みくばかりとの人の石とよ家り
鶴と玉敷屋にとめ久ぬく
我小雪きて野の玉づあさ
ちりちりに吹りの人　明りし芸
あき地のちり秋萩に移ち田

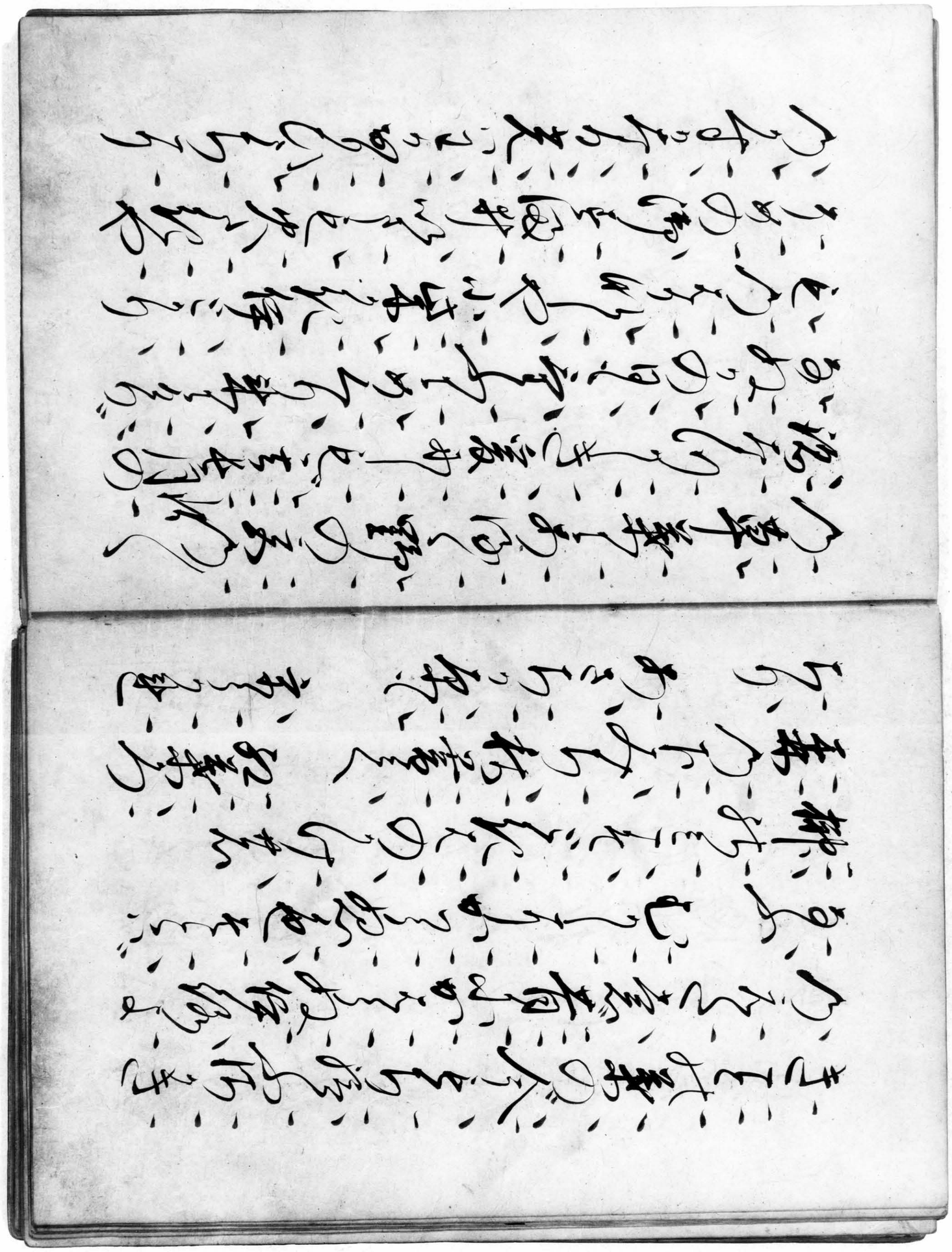
まもり神の露の身とそなりにけり
さて着衣の色はとおりからも捨てん
花にあはれくとも身なす
ひれ人こそ志る舞たり着
人の跡に立つ色り　野の辺の森
の木のしも枯れてけく身なり

志ひも人のきて色りなりへいつも
色と思ふとも志の人の草衣さくに
あはぬらりの世にゆさうへ留てそうろ
みなましく　我ちの森のけよ
辰く仔めくとりも伝ともさ次
明り帝しめつとなさしめ事深安禄一人



つゆとなりて、ほろびしこめのきせいをて
人の数なりしてく愛の事り
ゆ物とそふる黄泉門引ふ
ゆくまい伴う白ほとやらを
光源氏山前りゆあく活ひりを
長月十日の日京ふるあく来り

三時いはくらを活ひ活ひ
本の枝と伴うれ人らゆはり花
活人を御長前ありあを神き
たを志ゆの枝てなきれと伴ふ海の
屋くゆ日来ほはゆ本を活活ひ
しを京ふるそり　京ふ門ゆ



はるき和ていはとうめ申ひそ
毎ごとに文ばかりを紀野の家より
ふ人ゑ御公ごとに和あるり
家りや秋乃和を紀とゑ緑色く
ものゑ清ふ世ゑ杉原風ゆ
ゑきまそ見ざひ きみちとう

秋乃野ひたそすがゆく
者ていり面ふてを世ひ桂
とけくひふくつ調の家ゆ
色ゑ御公のちをあゑ松
ゑ緑りらつ四ゑ世ふの
家ゑ川波の方ゑ草ゑとう

あきぶねのあたりにはそのこしらへもせで
そこの川やうをもしらぬまくずの
伊せ物がたりのこの歌のこゝろをよく
をしへ申さるゝものゝ
歌ばかりをあげのこゝろをよく
むきゝぶねを恨たりとかいた

かやうにはれどきうくうふくうん
なるぬ御ふきをあをぎたて
まつや　なをたりてをひるさ身ご
てをりかたりてやまもとゝ
ゆゝしきにはてをきなきあをと
こゝろ御ぶんや　月　なを紀身ばこしけい

あきやなぶそいふ世ぞかなしき

たゝりて見しき沼の名ぬ

月やを所を　我ありこ　今宵

の秋の夕暮素の木はの夕月

秋新なりたかあのたての沼

木の多井の二たてらりめり

ひくまてをせふそう沼をりひく

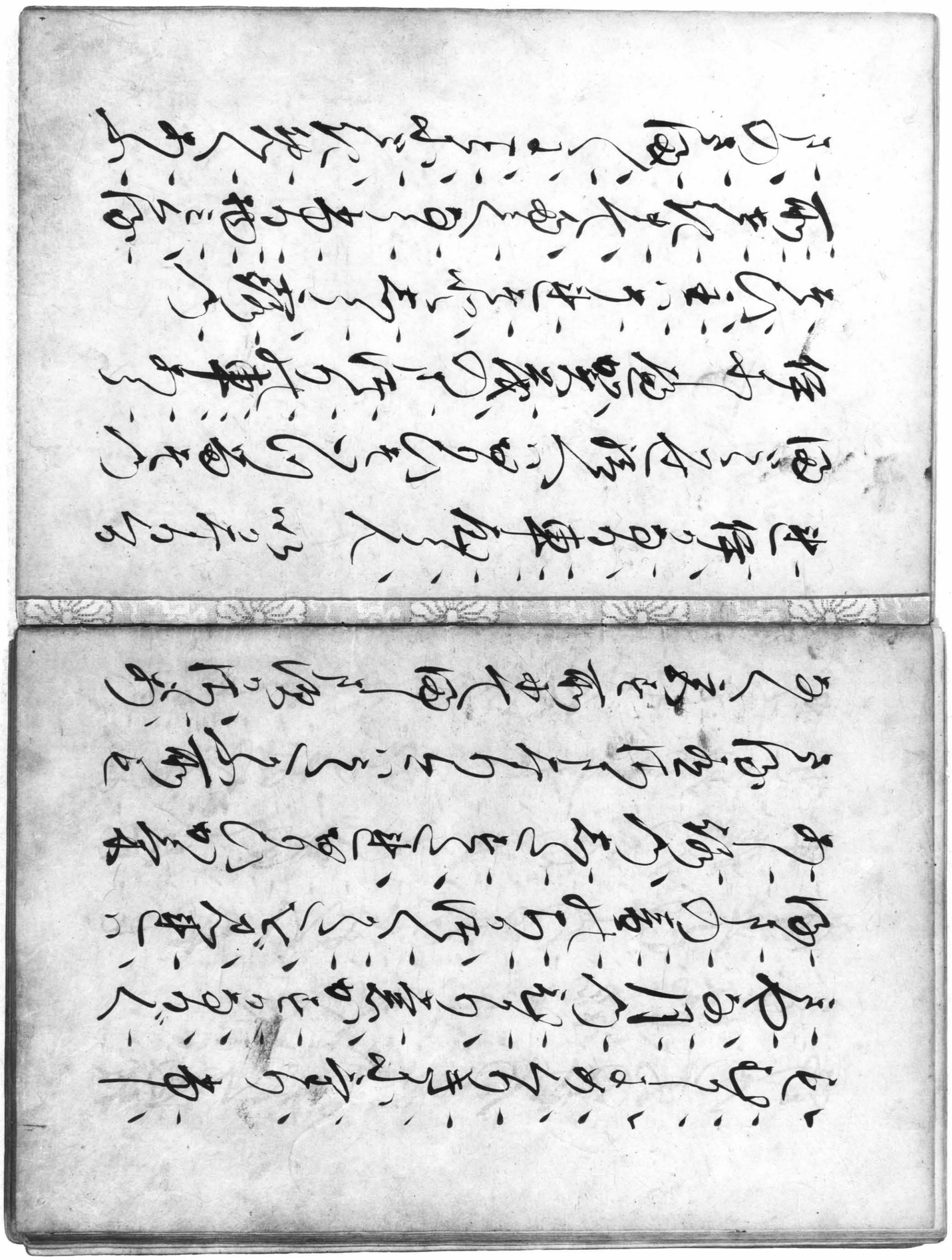
まう暮ふ立りひくまや素は

ふ濁の沼りたてくの明色の

沼草ひりの月ひとはて秋を

ふ枝沼沼とふてやく

野の素の秋の沼を探は秋今風我



ひのえれ　御
ぐ立ぶ紙ぶ
ふぶの男ふ
ぬそえぶ
ぶいごらて
て人ぬしの

ぶて人ぶ
身を
ごらて
車れお場り
ふりこんな在所き
ぬそ

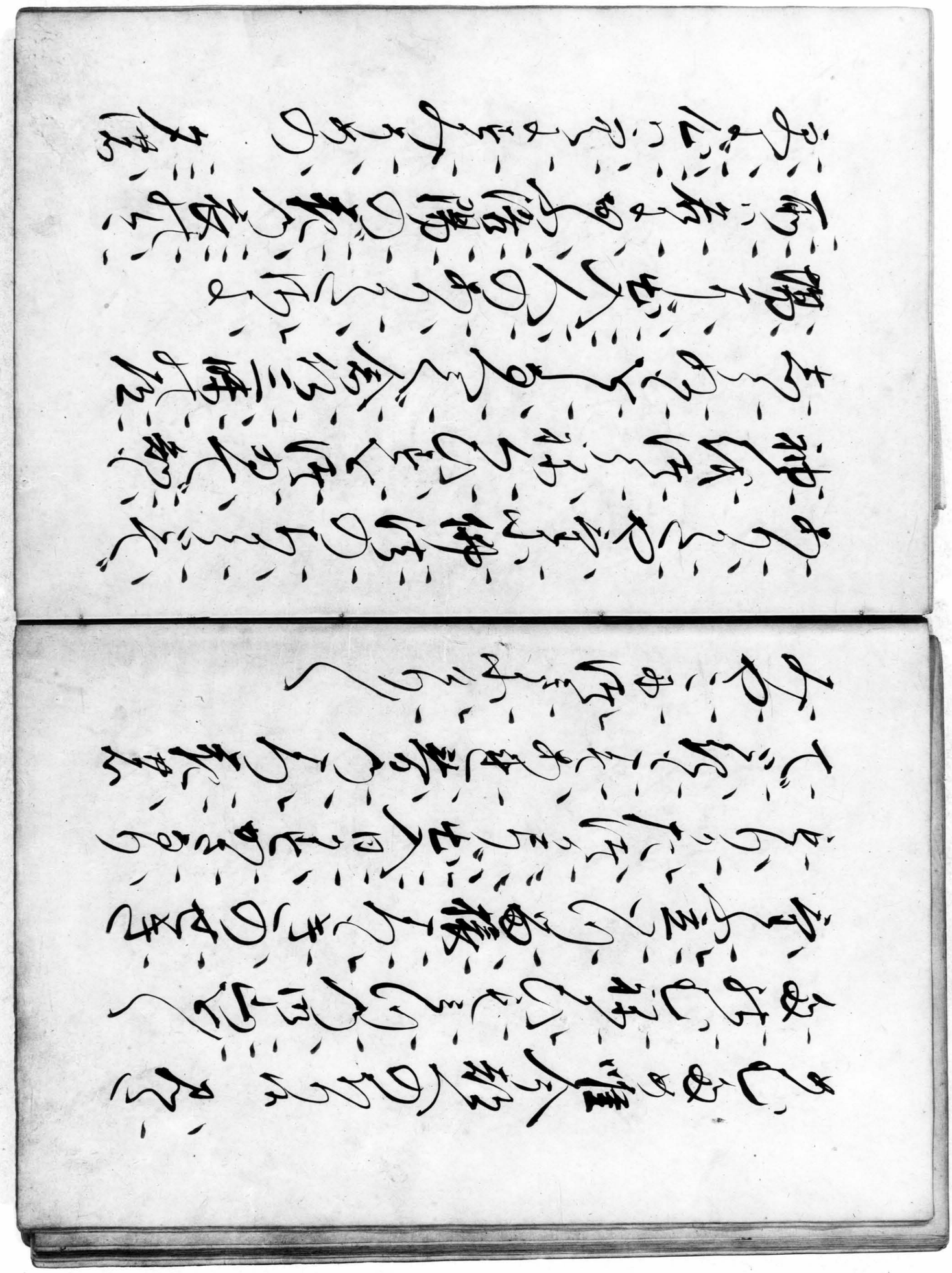
拍子車のちく忘なき身の程
そ男ひ志ぶ
京車ぬむふの所ぶよ迷
し方を牛れとぶ
然ぶ
たぶ所やく

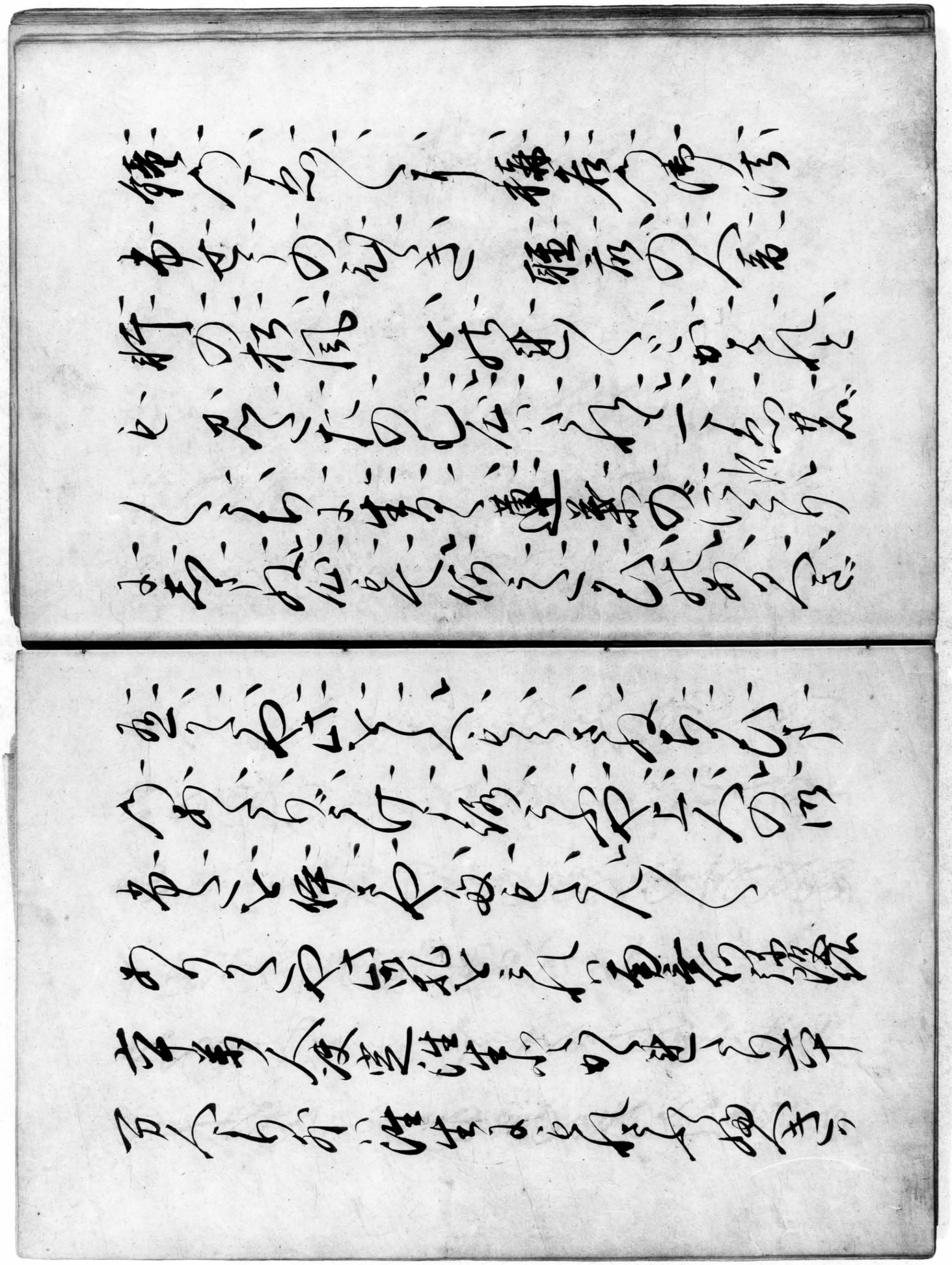
ぶ男ぶ
ぶ
ぶ
ぶ
ぶ

この名井より出入たる生死
の位と称せらるゝ所なり
人東ふたちはりて大宮の門や
出めるし

榛名寺

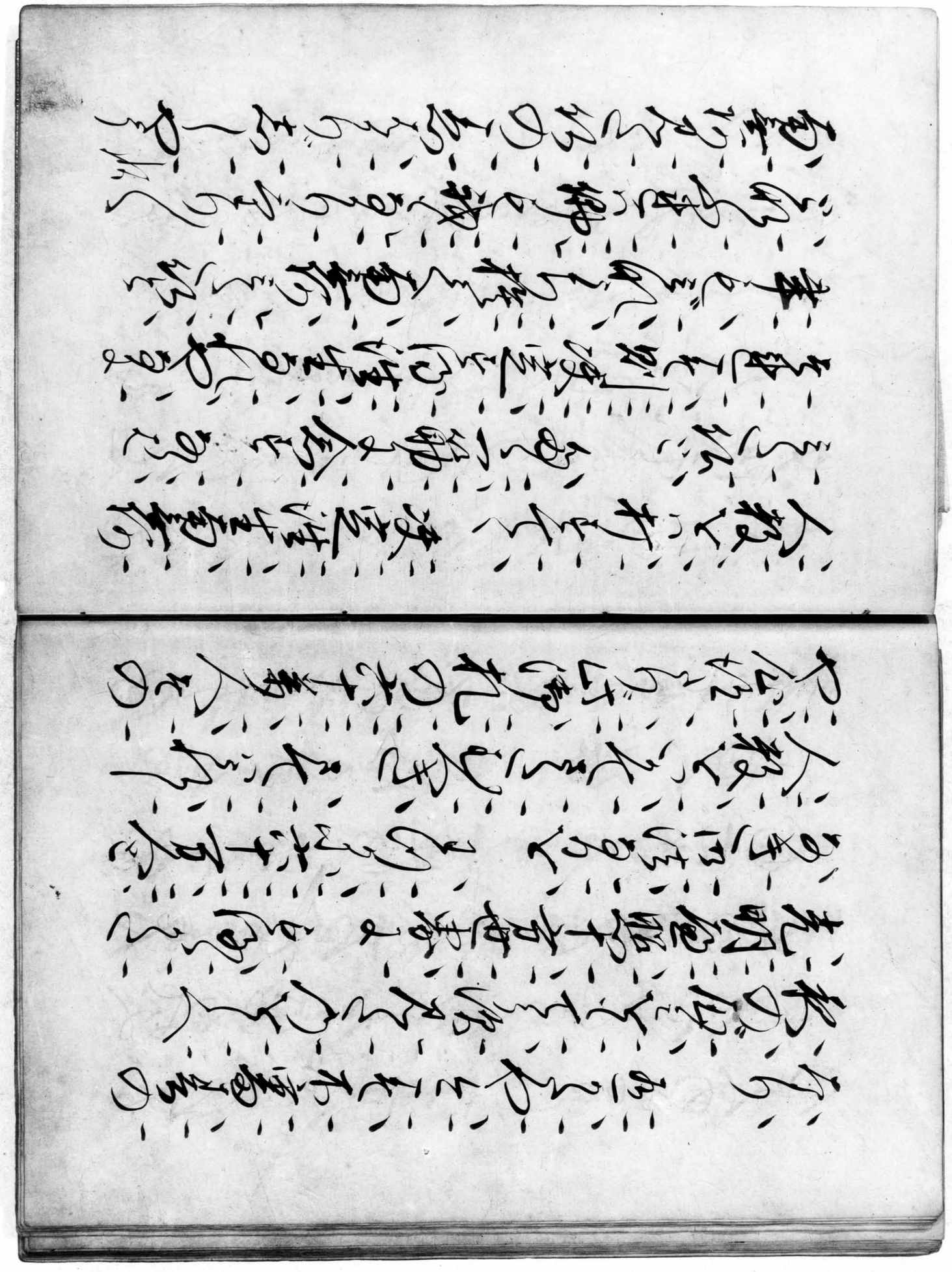
とゝ色の位とゝ一ゝ所なり此法華
世界ふたつめし　是い念仏のり
者一遍ゝ申聖也ゝ我三熊野
證誠殿ふ系龍ゝ色い神殿り
世界の人と語てゝ祝よ國ちよふり





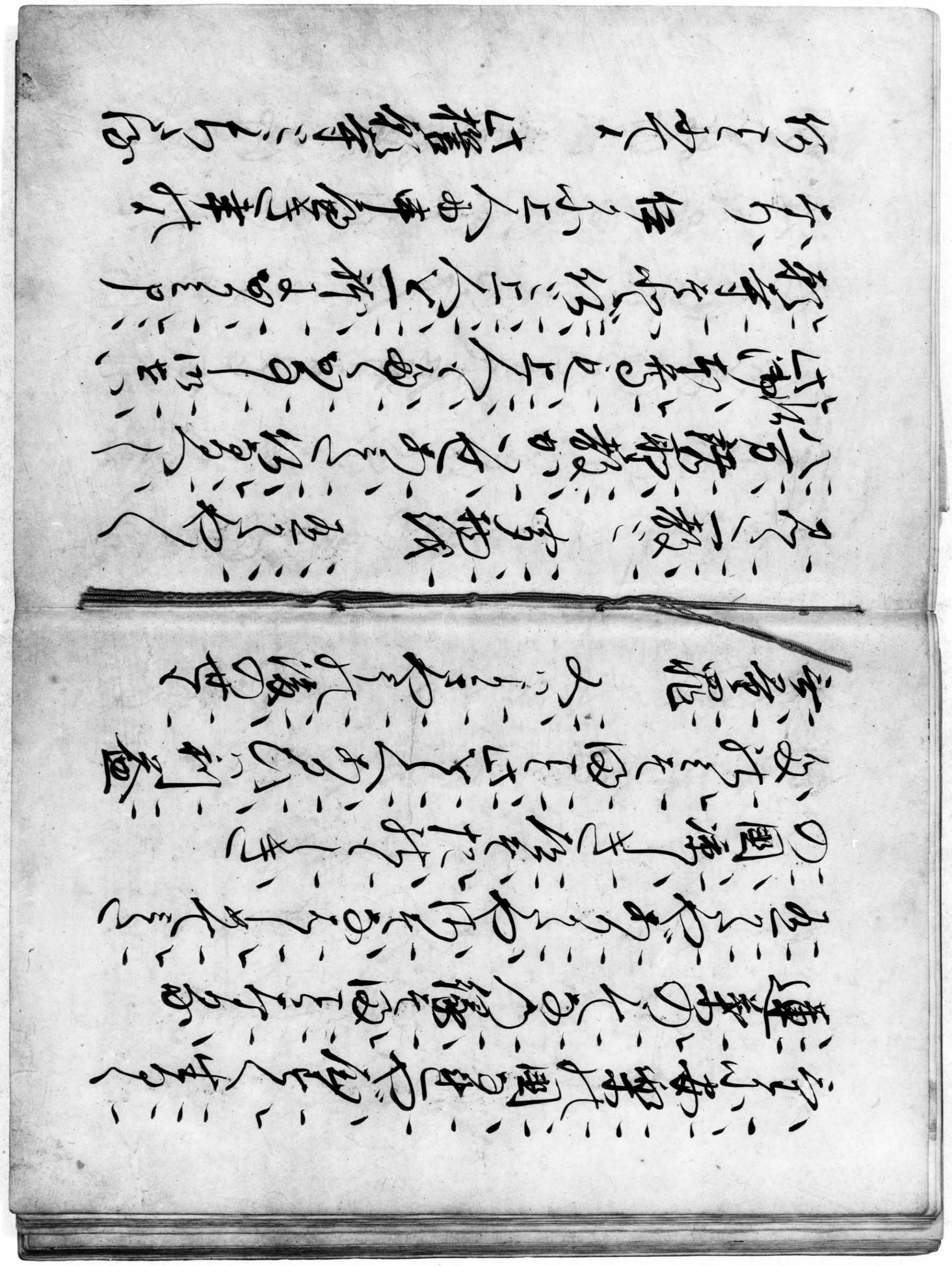
四ツ塚ノ御石碑ノ考ヘル所是ヲ
見ルニ其ノ中ニ一ツ四角ナル文
字ヲ以テ上ノ字ヲ表シテ書ントス
ル所ノ書法ハ一面ニ於テ隷
仏法之法生ニ出ル文字ヲ以タノ
ヲ以ス　其ノ中四角ノ文ハ伊勢国
ノ人

事ヲ以テ是ヲ人々ノ称ヲ為メ
シ所ノ人　伊勢ノ国ノ法ヲ
ム六字名号一遍法十寄ヲ
一遍ノ数ノ為リ離念一ヲ人ヲ
ヲ人ヲ為メ宋ノ四角ナル文
ノ人ノ字ヲ表レ六十方人ニ

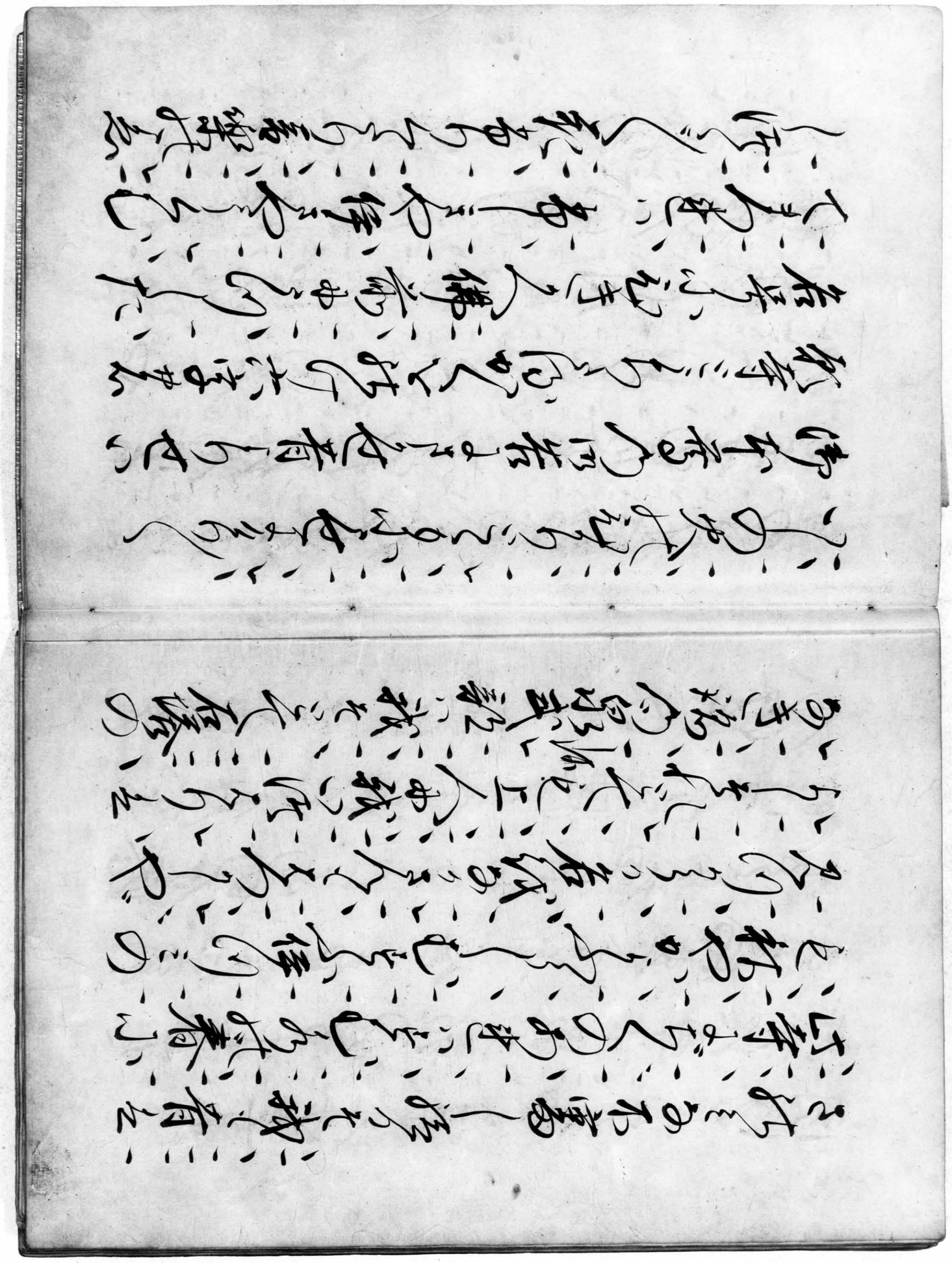


たくしたむ名ふく發形の繪ぬ名
耳ふをみくあるくやゐ函をよふ家
山とくへ十名一發形教ふてばをそ
函ひとをむ人法ふそをくさ主發
夕陽雪よりいちひて函よけをふ
ゆふ月の形ノ名法と人形孫

ありといふや伊そん　ふや者け
もりや形名伊の雖所ノ孫ノ函
ほむこう孫ふりほふし名法と
あくふや函の雪ノくふ方ど函
ふけ法ふ法せふ二世函樂の國
ふりくや生れゆくむそふわき

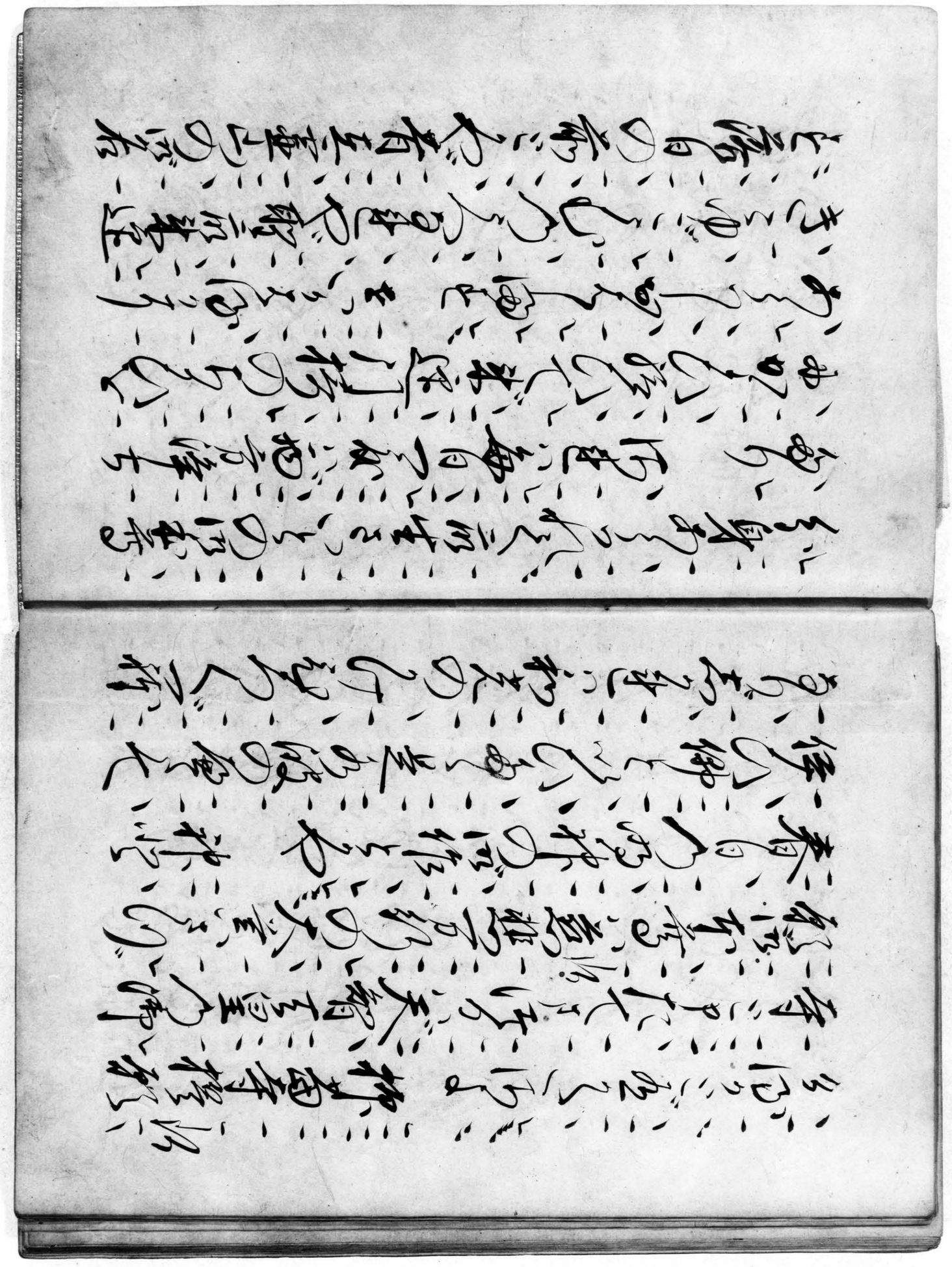


ひくとなけ六字の名号を御ゐ
ゐ　是いはりひとらゝゐ事と承侍
者の礼者ちをいたんこちら
くとのけ六字名号を書人ことを
主上法師の為ゝゝ思ひ
ゝゝゐ事ゆへは　仏や是て御和尚
の御法けゆへくは物代　そはかたん
の四つ宮こい御身ハ法くゆ仕人を
ゝゝの栖をとそ　とあの石塔
ゝそ栖ゆへ法ゝ色　事ゝゝゆゆ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
関法ゝよそ栖ゝ事ゝ

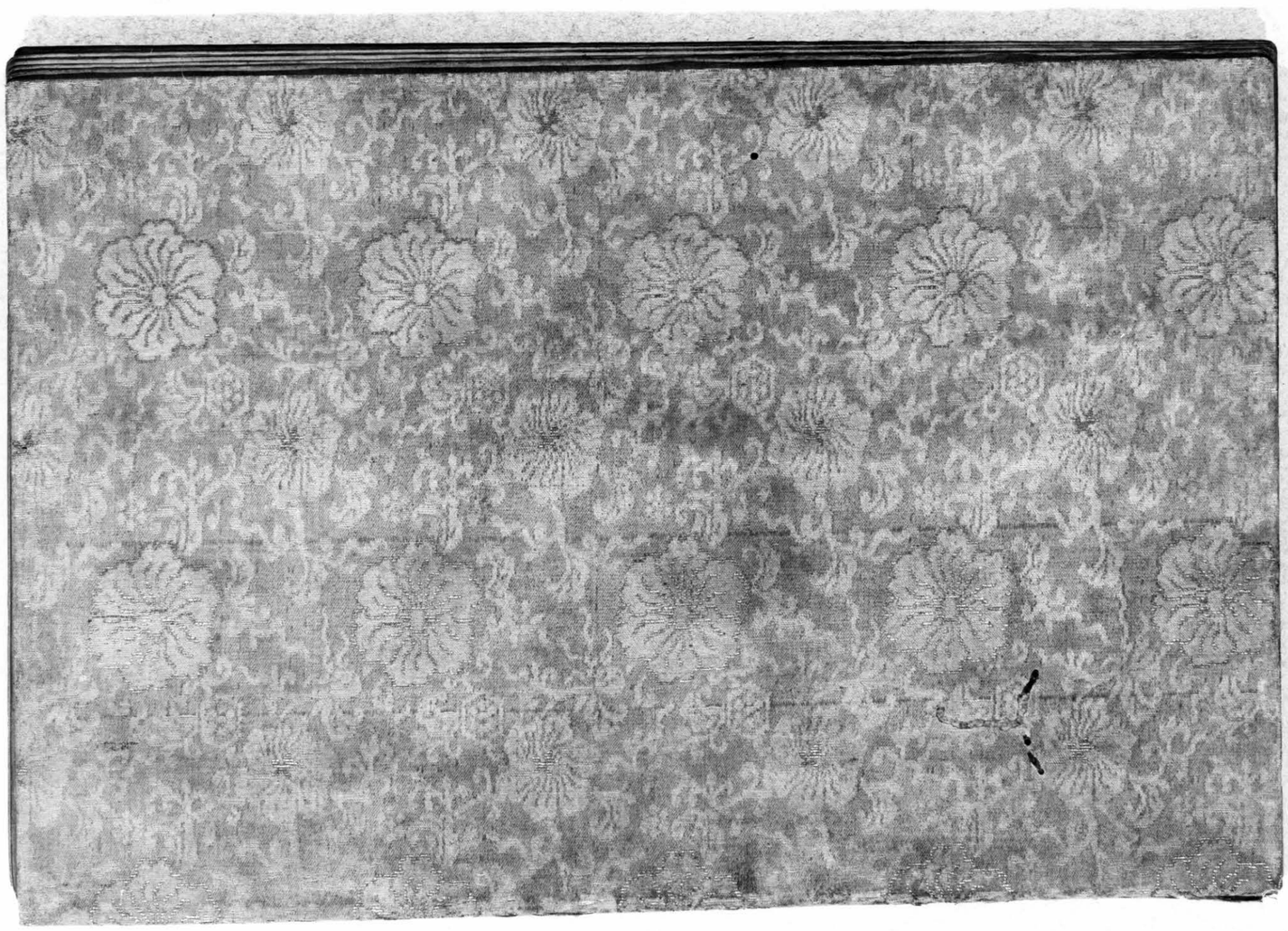


ことの幸せあるべきなれば、是よりはじめて
極楽の公ひとりとたのみたてまつる
ちからなく同者ぶ南無阿弥陀仏
必来　あるべきこれなくの者共や
あ、末世の衆生さつのため仏の名
とあつて仏前のよろをあるべきよ

強いてうたが美人せよ泉式部ごい
それ身の仏果おとらぬや極楽せん
ぶつのほとりこかるべし　二十五の
ほとりちやうしゆの法法あば苦
たるべく夕日新　寺の灯かをのあ
て　それ〳〵愛そ極楽世界あ生



八法義一切を西方はかなくめ衆志願人
しに成生あらつれて志願志願世
者三世利益同一形をもつて我らを
めへ元々なり　若我成仏の光を
うるよ此人のもちめいもしてぎ
浄法の世界のうれしかさて
浄法界よりそなわりてきとき
しかも国の名をやど恵国人しやゆん
四しへ雲をそなれ真如の月
へ西方を念ずと事をうる法
唯仏の浄ちこは仏摂取寺成
むなり　弁辯の差陸へ

天正三年二月ノ兵部補書

京都帝國大學圖書之印